江戸名所圖會

十

ル 4
5103
10

武蔵國総社六所明神社　府中驛路の左側よあり延喜式内大麻止乃豆乃天神社是なり後世ふ至るく同く弐内小野神社を合せ祭る故ふ今両社一社の称あり神主ハ猿渡氏其餘社司社僧皆奉祀す

本社祭神　大巳貴命　相殿　素盞嗚尊　伊弉册尊

瓊々杵尊　大宮女大神　布留太神（以上六神これを俗よ六所明神と称せり）

天下春命　瀬織津比咩命　稲倉魂大神（三所の御神と称せり）

以上三神これを客来もつく九神合せて共六所宮と称す此三神のうハ一宮と小野神社との条下よ詳なり

東　武蔵大麻止乃智天神記曰　武蔵國風土記曰　延喜式神名記曰

所祭大巳貴命北安閑天皇乙卯始奠宮社花時以之新稲祭之云云　大麻止乃豆乃天神社云云

御産氣武蔵國多磨郡八座

鑑曰治兼六年八月十一日己酉及晩御輦所有

伊豆宮根両所権現并近國宮社

葛西三郎云

圭田六十七東六毛田

參為御祈禱被立奉幣御使於

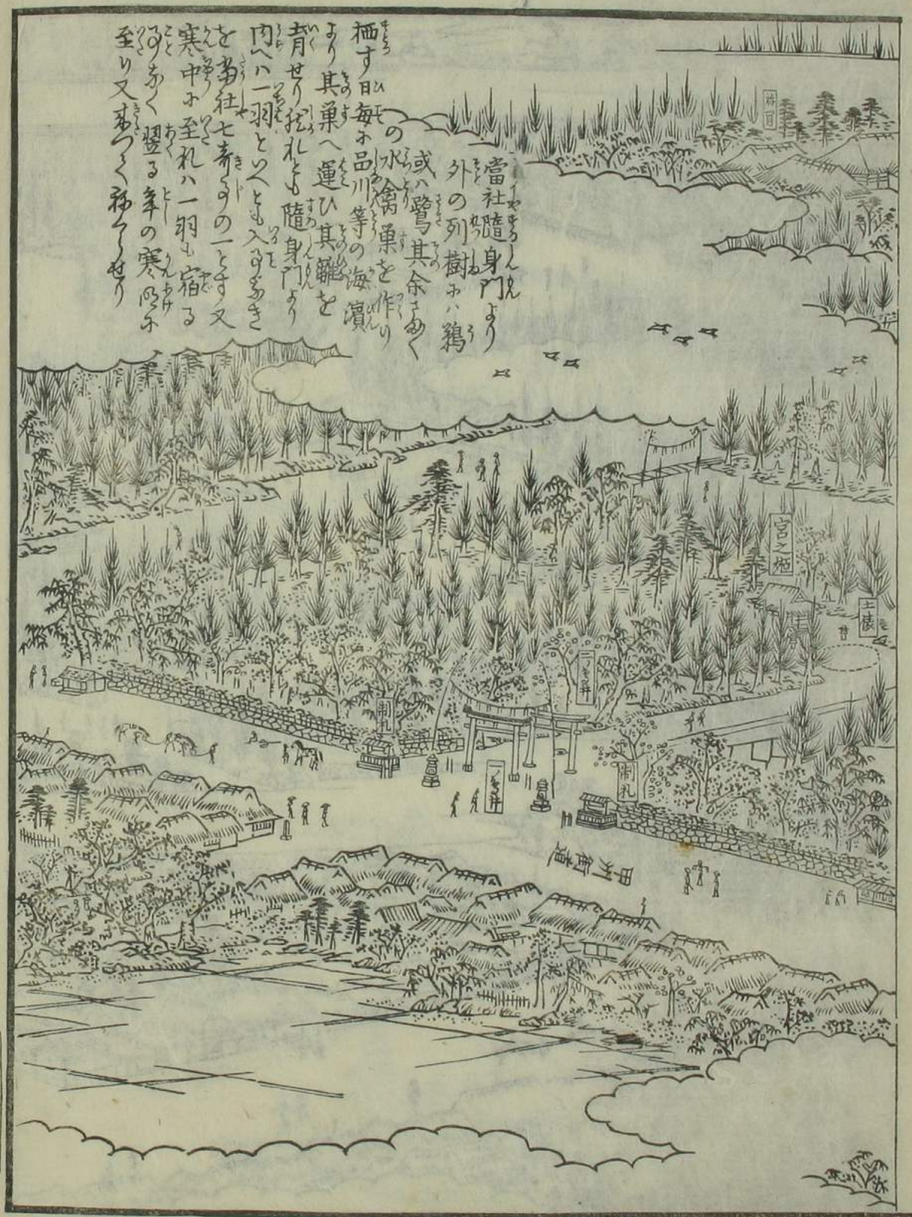
武蔵六所宮

昭和41年12月20日寄
原安三郎氏贈

ル4
5105
巻10

41　9555

府中六所宮
小野宮と分倍の境府中より関戸へ行道ハ往昔奥州より鎮守への通路かてこれを陣海道と称する元弘より永享の前屋戦争の地なりとあり
茶屋
旅店






同書曰　寛喜四年二月二十四日武蔵國六所宮拝殿破壊有修造之儀武蔵左衛門尉資頼奉行之云云

本地堂　本社の左ニあり中ニハ釋迦如来薬師如来大飛若経おゐ讀修の仏せり　此堂ニ神輿庫一基のそのひり社司神秘と阿弥陀如来銭像同左ニ並ニ高七尺ほとの座像なり上ニ假そめ北雨ふす　又同一　文字を鑄上ゆせり里諺ニ狄父の庄司重忠愛妓の菩提の為ニ造立せしと云ふ　文字ハ高く鑄阿弥陀坂と云ふ　重忠の造立ありしを考ふるニ重忠ハ元久二年武蔵國二俣川ニ於て討死せり　建長五年ハ元久二年より四十八年を歴たる後の年号なり　然れハ此銅像ハ當國の國分寺ニ安置ありしを人の移し此ニ捨置しなるへし　又云ふ　此堂ニ安置せしと云ふ　是ハ誤れるなるへし

大勧進念阿弥陀佛　明連　大士藤原助近
右志者過去二親并行叢□新發意乃至
法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身
也
建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

護摩堂　同一並ニあり不動尊の像を安置せり　本社の前ニ御供所右ニあり

東照大権現宮　本社の左ニあり　本社の後蒼林の中ニあり　欅の古株やゝ数十圍あり　相伝ふ　四年戊午ニ創建と云ふ　注連樹

上古國造此わより社參ありし頃門戸のありし址
ある哉ふ注連を 隨身門
の木像を 宮之姫社 祭神須勢理比咩
本社の右妃の神なり例年七月十二日近邑の神職來り集りて社前
おのく神樂を奏せり
なり賴朝卿の下知狀ハ天正の兵火に亡倉時世賴朝卿下知ありしと此神寶を執
馬場 一條の華表の内左右森の外よりあり凍の方の一條を 結馬
一條と又大門甲州街道と隔く北の方一の華表の内の左の右
ふもと二條の馬場あり慶長年間大坂市民利の便所寄附より後世繪馬
欠馬多の馬場の地多くハ社司の住居となりふるき形を存せるのこれと
但馬欠馬多の馬場の地ハ古牧の駒を飼ひし旧跡なり社前大路の傍に
馬市 毎歳五月三日ハ始り九月晦日よ終る此地の馬市ハむかし國造の在せし頃より
札を建く以警す 帝闕より勅使を遣し馬を取
良二十五匹を定規とす 此馬市 勅使 郡司より奉ると
なり 此地の馬を集く人民市 旧跡なり社前大路の傍に
浅草の藪の内と麻布十番との二所へ別れ移れりと然れども今も江戸
詣此所の馬場ふおいくあるを 馬口労頭 住例の
なり 馬市 當社
東照大權現宮へ奉ると云

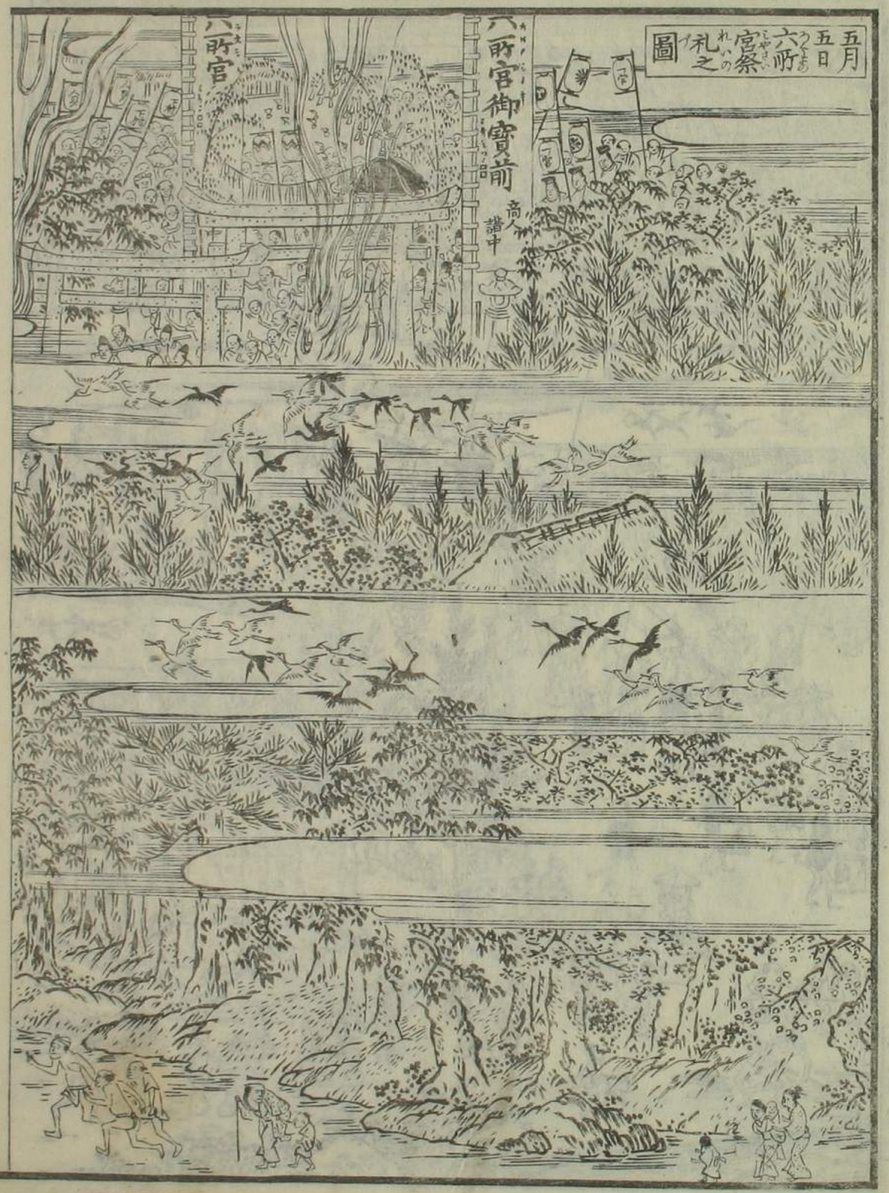
制札 社前大路の入口ふあり
慶長年間ふ建らると云

掟

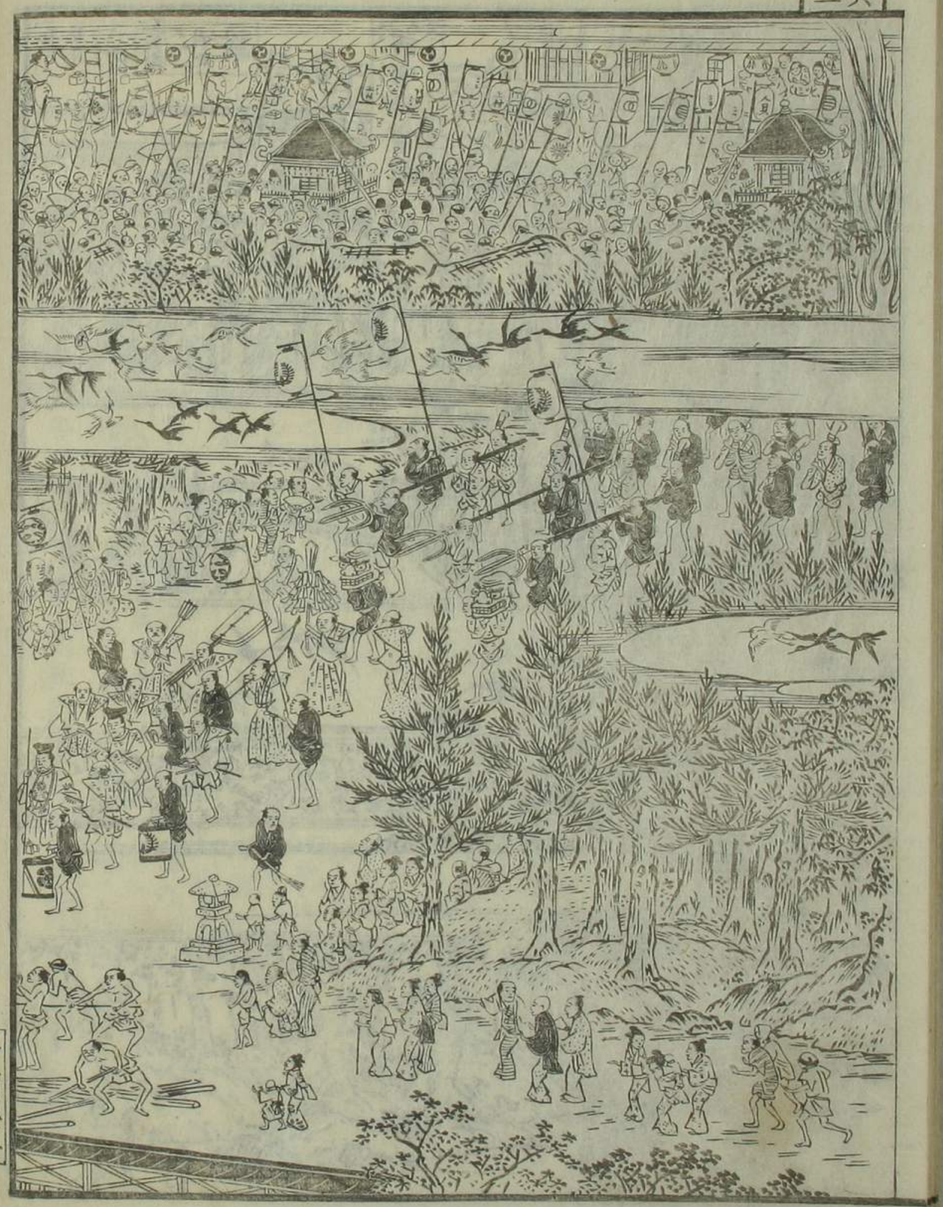
一此所ふおゐて馬町之事
五月三日駒くより初め
九月晦日を限くより
外ニハ一疋ニても
在留ハ堅く無用之事
附 遠方より參詣之
者ハ此下ふ宿ス
月日 奉行

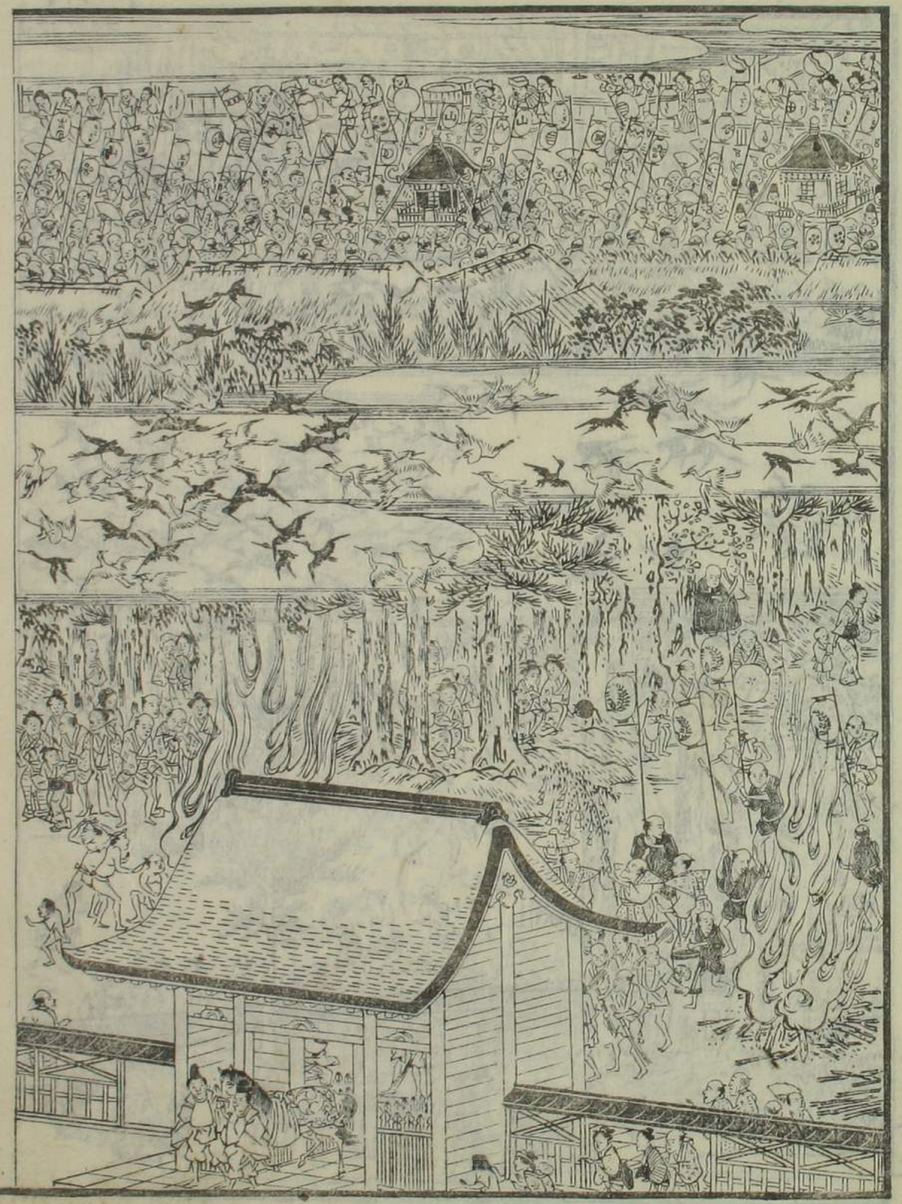
競馬 毎歳五月三日の夜ふ所宮の御旅所の前甲州街道府中番場宿の大路ふおゐて
華撥使として御旅所の 神樂 同月四日拜殿 大神事 同五日ふ修行ふも當社の
傍ある假家ふ伺候す 神輿ハ基の内七基ハ二の華表の前より甲州街道の大路を西へ渡し
殊ふ恐れ多き神輿ハ基の内七基ハ二の華表の前より甲州街道の大路を西へ渡し
終日神乘を 神輿 同廿五日ふ修行ふも當社の
後神殿ふ至る 神輿ハ基の内七基ハ二の華表の前より甲州街道の大路を西へ渡し
當日ハ終日神乘を 神輿 同廿五日ふ修行ふも當社の
後神殿ふ至る 神輿ハ基の内七基ハ二の華表の前より甲州街道の大路を西へ渡し
一基ハ隨身門の前より左ふ折 府中本町の方より出く 番場宿の角札
辻の御旅所へ 此間社家の華馬ふ乘し下河原ふ濱座の津保宮ふ至て
深秘の神事ありて 大幣の式あり 神輿ハ社家一統神主の宅ふ集會
神主儀渡氏農夫野口と 神輿 渡し
稱ふ 此野口と 神輿 渡し
家ふ假家を設ふ至て古例の祝ひをなせり
古大已貴命始く出現の時一夜この家ふ
和合ふ住ス 大已貴命始く出現の時一夜この家ふ
家岡野と 神輿 渡し

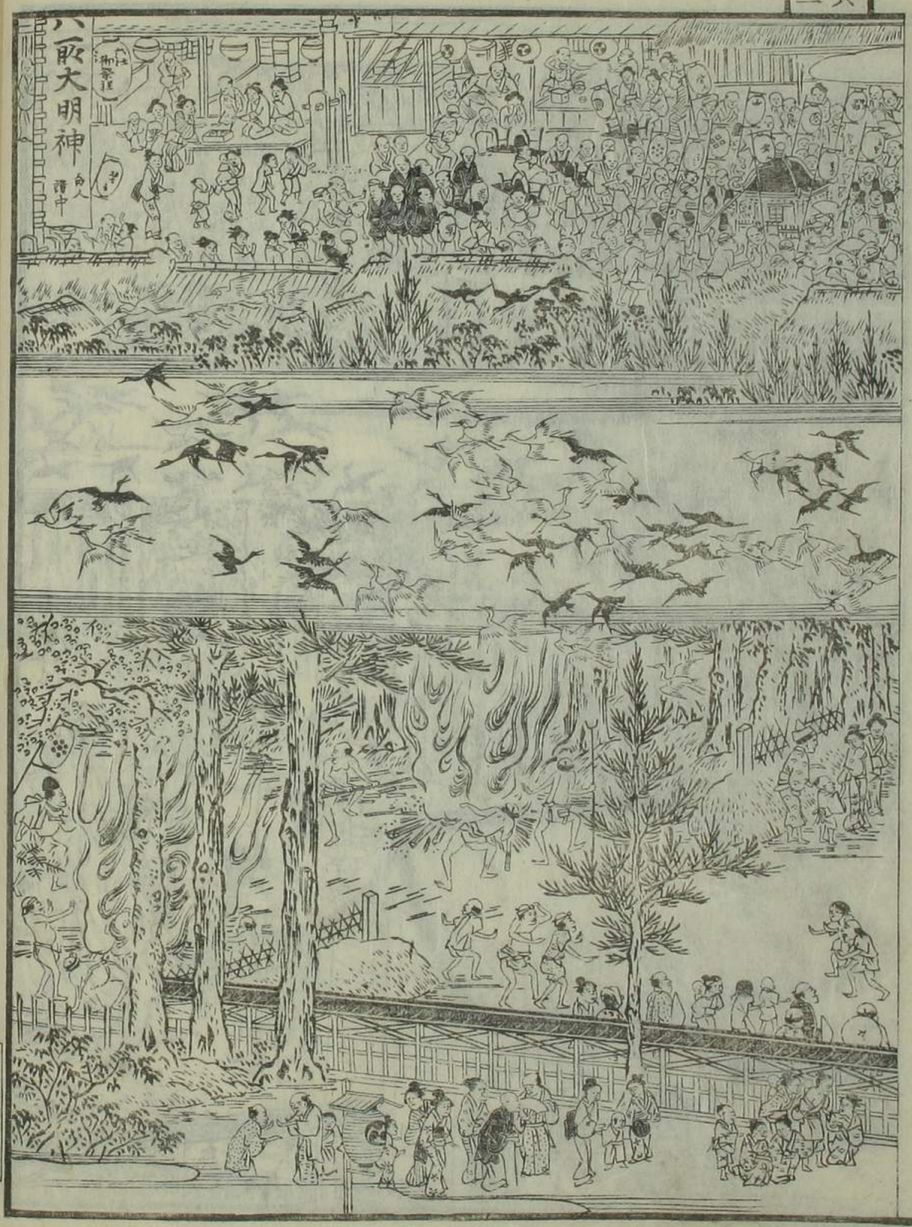
五月五日六所宮祭礼之圖




旧例なり此家ハ大巳貴命出現の時宿を求こまひしゝと罵ひのゝありて一家
滅れさりしゝハ辞しませしゝ神ゝ旧式こゝく終ゝく祈ゝ
来しゝ御旅所の前みおの流鏑馬を終ゝく還幸の儀をなせり神主ハ神
より市店ゝ至るまて一時ゝ燈火を點もろゝ先の間ゝふゝく社壇
より八馬上ゝて前驅ゝゝ帰輿ゝ及て二鳥居の左右と本社の前随身門の前西の
馬場欠場の方へ至るの間等すゝく四箇ゝ多ゝて篝火を焚て白昼の
如し又神輿供奉の道路を照すゝの挑灯尤多ゝくして実ゝ壮観ゝう御田植神
事
同六日ゝ修ゝを祠後百歩あまりを隔て南の方の稲田ゝあらゝくことを
刈ふ秧を持ゝ来ゝく田上ゝ集り一朝ゝ挿終りて後或ハ躍り或ハ角力を
催しゝ興とりゝく依秧こゝく泥ゝ浸ゝくも明旦ゝ到れハ勃然として
起又手褁を異ゝすとつゝしゝ終ゝ穂を同くしゝ節の進退ゝより違ゝるも歳と
して順ありゝゝゝなゝく水旱蝗螟の災なゝ
天下泰平神事　六月廿日ゝ修ゝ
六月廿日ゝ頼義義家両公奥州発向の時宿を求こまひしゝと罵ひのゝありて一家
此日を以ゝく小祭　七月七日ゝ修ゝ
祭ゝとゝのゝ麻布を製ゝを以ゝく産業とも手頃此府ゝも称ゝうハ古此辺多く
都ふ貢ゝまり手餘のゝとゝのを八此地ゝく交易せしゝのり中ゝ七月七日ゝ宮之姫社と本社とゝ
ありとゝのゝり　天下泰平神事
ゝ祥田面神事　八月朔日ゝ終日神楽を奏す前の宮之姫の社のお
ありり此日角力を奉ふ遠ゝ近ゝ年の豊熟を祭ゝ
ゝゝくゝゝゝを奉ふ遠ゝ近ゝ年の豊熟を祭ゝ
社記曰　景行天皇の四十一年辛亥五月五日大巳貴命此小野縣に

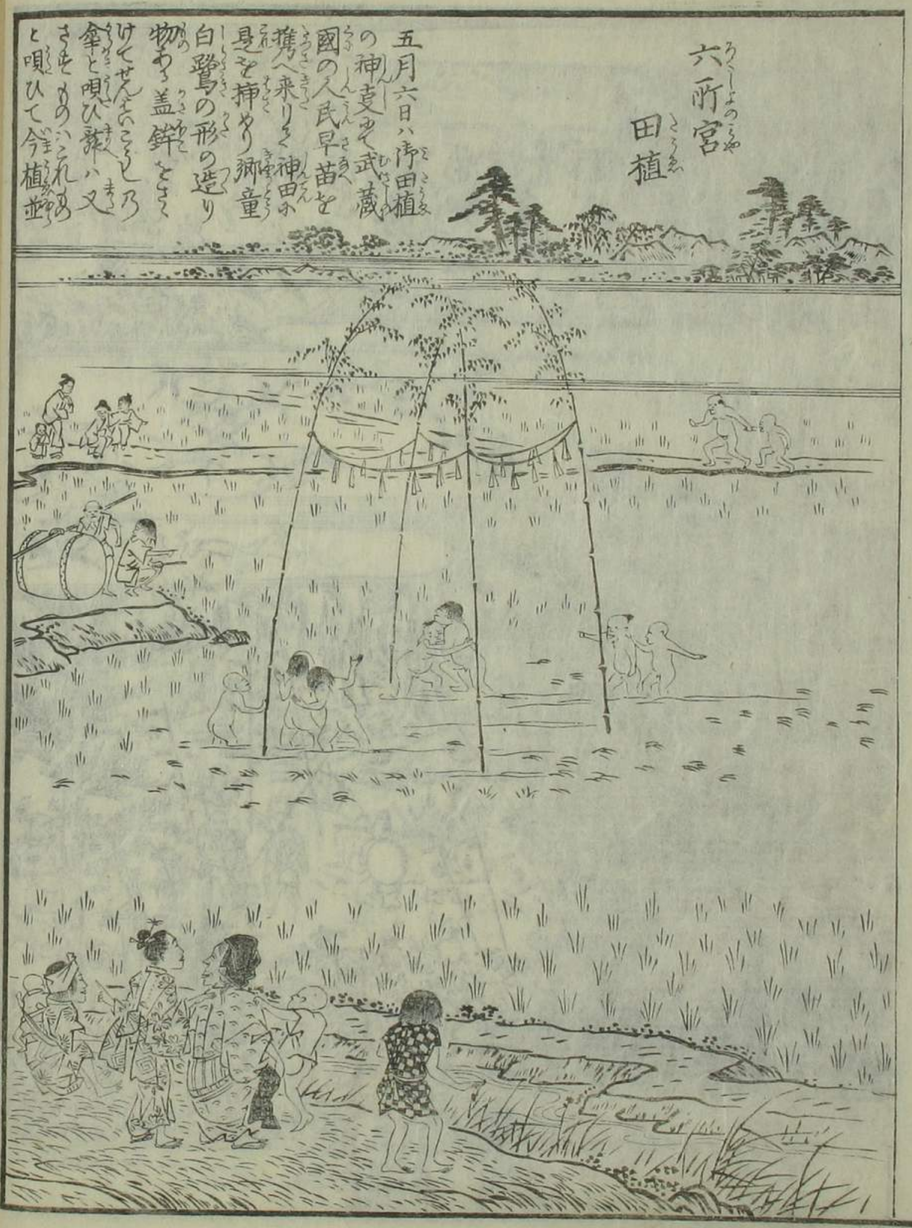





八敗大明神

# 六所宮
## 田植

五月六日ハ所田植の神事ゑ武蔵國の人民早苗を携へ来りて神田の畔を挿り猟童白鷺の形の造り物わら蓋鉾をさゝけてせんこうしろ傘と唄ひ踊ハ又さをとものいこれを植ゑ並と唄ひて今植ゑ並



田の中ハ下り立て早苗を挿ゑ踊歌かゝまくらく有〳〵も似をゆわの中ハあろうこえろ一枚のうちからて多起立く業ハ多んとしてうきり〳〵さう

出現神託あるより祠を経営して里人崇敬する大麻止乃豆乃天神是なり
延喜式大麻止乃豆乃〻〻風土記大麻止乃知と豆ハ通音なり又大の字を
麻止を以てか伊麻止と或ハ布止麻止多麻止かとさまざまに称へしより
成務天皇五年乙亥兄多毛比命を〻く此地ホ國造
天穂日命の孫出雲臣祖名二井
宇迦諸忍之神狭命十世の孫なり因て茲ホ府を開きぬ
又大巳貴命ハ此地出現の霊神あれハ是を崇ミて祖神なるを以て
武蔵國の國造の権輿
素盞嗚尊を合祭〻兄多毛比命ハ出雲の臣の祖なるを以の祭神の内珠ホ素盞嗚尊を崇る神社ありと云
相殿ホ伊弉冊尊瓊々杵尊大宮女命布留大神等の四神を配
祀〻新ホ此地ホ宮祠を経営ありて圭田を附〻て國社と定
此を称して六所宮大麻止乃知天神と云又天下春命一宮の祭神なり
頼徴津比咩小野神社の祭神なり倉稲魂大神小野神社以上の三
神を六所宮の相殿ホ迁座なして客来三所と称〻是を
祭るホ國社の禮を以すべし爾来大麻止乃知天神小野神社二社合
祀の社とをあり〻を〻安閑天皇乙卯年ホ至りてハ春冬〻

二時の祭祀を行ふ〻由旧史ホ〻〻〻〻然ホ星霜を歴て康平
五年ホ至り源頼義義家両公奥州安倍貞任宗任一族征伐
發向の時當社ホ詣めひ軍の勝利を祈願ありて夷賊平治
凱歌の時報賽と〻〻一
めて以成功を謝〻まるる其列樹今存せり
詣て請禱〻大ホ戦勝の功ある文治年間宮社を再興〻又
壽永年間継嗣を求め頼家公を儲く葛西三郎清重拠
〻て神器を献せ〻むる寛喜四年ホ武蔵左衛門尉資頼を命ぜ
所の祭祀今ホ連綿と〻て當社破壊の修理を加へらる
将軍家相継て崇敬衰へす〻て廃せす後足利家ホ至る迄世〻
る信あ〻ひ社領五百石を附〻御祈禱のゝを余せる関原
大坂の両役ゆ當社の神主猿渡左衛門佐盛道を〻く御勝
利の御祈禱を修せ〻めひ御感状御直書を給ふ後二代

將軍家よりも又御書判の御直書を給ふ殊ふ御在國の
總社〳〵を以〳〵慶長年間石見守大久保氏某をして神
殿を新ゐ國家の祀典ゐ列せ〳〵む且命を下し〳〵馬市北
法則を定給ふ後正保三年府中本町より火出て當社神
領の地ゟ至る近皆悉く燒亡を依て寛文七年丁未大和守久世
廣之侯をして〳〵造營使と〳〵宮社御再建ありし
寛永元年社記云神主猿渡三河守藤原盛正天正年間北条陸奥守
氏照の爲ゐ八王子の城ゟ竜る此城没落の時盛道こゝゟ戰死を又此炎火の災ゐ
かゝり〳〵當社悉く灰燼せり旁世〳〵將軍家の證状或ハ秘藏の神宝等
こゝ〳〵ひゝ〳〵とかゝり云

六所宮御旅所　六所明神ゟ一丁半ゟを西の方府中番場宿の
中程相摸街道への岐道札の辻の傍ゟあり毎歳五月五日大祭ゟ
辰ゟ夜六所宮の神輿をおゝふ辻〳〵まる其式ハ前の条下ゟ
詳なり

御田　六所の宮の後の小径をゟて百歩ゟゟふあり豁然ゟる稲
田なり東ハ悠遠ゆ〳〵く眺望分明なり南ハ多磨川の流を隔
て〳〵長岡の上ゟ短松の立ちゝをる世ゟ所謂向ゟ岡是あり此
地北ハ府中の驛舍ゆ〳〵く六所宮年中行事の
六所宮年中行事の下ゟ詳うなり

本覺山妙光院　真如寺と号て府中本町の南の小路ゟあり新義の真
言宗ゆ〳〵く花洛仁和寺の御門跡ゟ屬ゟ清和天皇の御宇
貞觀紀元の年真如法親王の御願ふよりて〳〵慈祝僧正創
建ありし〳〵佛刹にして行基大士彫造の地蔵薩埵をゟるとし
長五寸五分若干の田園を附せ〳〵る然ゟ當寺度〳〵の兵燹ゟ罹り大ふ
荒廢なし〳〵り〳〵を永享十一年己未法印宥源長禄三年己卯
再建し〳〵當寺中興の開山とゟる〳〵寺領ゟ
家帶の額真如寺の三大字ハ勝仙院僧正日光の筆同し〳〵向拜
ゟ掲る本覺山の額ハ南山の沙門乘鎮の書裏門本覺山の額ハ

明光院安養寺

天満の筆書院無為心の額ハ佐々木玄龍の書なり観音堂ハ門の入口左の山北上よりあり大悲殿の額ハ僧禅大僧正覚眼筆と云本尊十一面観音の像ハ作長二尺五寸ありて聖徳太子の作と云當寺什宝よ北条氏照の書簡二通を蔵を其餘芦ふ鷺ふ画幅ハ御筆の物ゆゑ牡丹唐草よ扇を縫物ゝゝる五條の袈裟と共ふ御當家より給ふとゝ云なりとのへを

古磬一枚 筆物ゆゑて銅色愛をゝし 墓ハ左甚五郎う作ふ

睿光山安養寺 妙光院の南の小路を開くと云 此地の小名を矢の崎と天台宗上州世良田の長楽寺よ属を本ま阿弥陀ぬ来ゐ同し並びふあり

座像一尺六寸さかりあを作者詳ふゝ永仁年間ま海上人中興閑山ゝり近き年地魚の災よ罹ふく旧記を亡ゝゝ

武蔵國造兄武日命殿館旧跡 妙光院の前よ岡を云上古國造居館の地なり御入國の後此旧跡よ省耕の御殿を建させられしより大樹屢ゝふ入ゝせられゝり 正保三年丙戌十月十二日府中本町より出火して此御殿焼亡せり後ハ御再興もふゝふり享保年間里民の乞ふ任せ陸田となし下さゝゝふり故ふ土人ハ御殿地と称せり此所の眺望左勝れゝり

四箇國ゆく國毎よ國造一人つゝありて神祇祭祀を掌ふく民事を治ふ 嵯峨天皇ゝり淳和天皇ゝり仁徳帝の御字よ遠江國司ふ六十日本紀ふ見ゆ 崇峻帝の御字よ河内國司と云ふり聖徳太子の憲法ゆも國司國造のゝゝゝゝ 諸の國司國造郡司并百姓等とゝゝゝ 天武紀よ分割併省なり 天武紀よ六十四国ゝゝ 日本紀よ見ゆ 聖徳太子の司を置ゆゝ尤國司ハ國造より位高く権重き故ふ國司國造と次第して称せゝゝゝ 後又國造ゝり位高く権重き故ふ國司國造と次第して称せゝゝゝ 後世この國史ゆ往ゝ國司國造のゝを載られゝゝゝゝ 廃せゝゝゝ

是改村 府中の南多磨川の北の岸頭ふあり此地の里正小井田氏の人あを其家系を按ふ祖先ハ畠山庄司重忠の四男井田四郎重政の末葉ゆて小田原北条家の臣井田摂津守是改ゝ子孫なりと云天正十八年小田原没落の頃八王子の城敗れしより後此地よ住を依て是改村の名あり

悲願山善明寺　圓養院と号ス府中本町より閘戸へ行道の右側ニ
あり　相模街道ニして古の鎌倉通道へ　天台律院ニして常明院ニ属セ本尊ニ阿弥
陀如来の像一丈六尺あり　胎中ニ慈覚大士彫造の阿弥陀如来の像を安ス　坐像
久く中古寺院荒廃して記録を失セ然ニ近来編無為解脱居士
俗称依田伊織　當寺を再興ありく　證海上人を中興開山とし　田園
等を寄附せり故ニ居士の肖像あり　束帯の像なり　側ニ内陣の額ニ
毗尼蔵とありて准后公遵法親王の筆なり　弟子證海の像もあり　解脱居士の墓ハ
堂後ニあり　彼岸山文庫ハ本堂の右ニあり　庫中収蔵セる古
書籍ハ解脱居士の筆書ニて凡そ百二十二箱あり（此文庫ニ収むる所の書籍目録一冊あり）

津保宮　同所四丁ばかり西南の方下河原農民の地ニあり　當社ハ國造
の霊社なりと云ふ　今祭ニ茅祠を存するのみなれど毎歳五月五日六所
宮大祭の日ハ當社より六所宮へ奉幣使を立るヲ旧式ニして則六所
宮の神官馬ニ乗りく是を勤む

按ずる津保ハ壺の渭ゆゑくつわきとの意なるべし源氏物語桐壺巻に亡き人の宿のつぼ前栽よるを植ゑをくらんと云ふ河海抄に亡き人の家居の建蔀を云ふ又壺ハ家居の建蔀を云ふ今下河原中河原と称する辺ハ古の園造の庭ありしなるべし

分倍河原　同所の南代小川を隔て耕田をいふ　太平記鎌倉大草紙南朝紀伝等分倍を作る分梅を作るハ誤なり

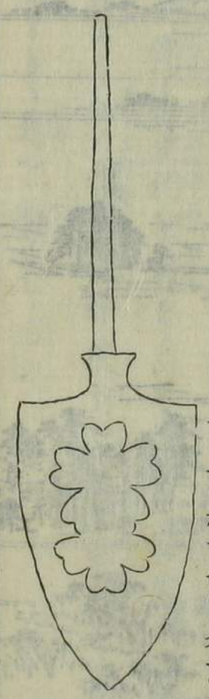
元弘三年五月十八日新田義貞朝臣鎌倉勢と合戦あり〳〵地ゆゑて雌雄時刻に決せず〳〵人の墓あり　土人首塚胴塚なと称へ今猶此辺の田間に存す

享徳四年の春も遽倉成氏上杉房顕なる〳〵ひ持朝と此地を争戦〳〵大ひ上杉勢敗北を又享禄三年の夏ハ北条氏康向ふ岡の小澤の原ひ屯〳〵上杉朝興ハ多磨川を前ひあて陣をとる両軍府中の驛に相戦ひ此上の合戦ハ大平記鎌倉大草紙五代記等ひ詳なり

此餘も度〳〵血戦あり地ゆゑて土人今も遇ふ事の如〳〵

大サ圖の如〳〵

桜の花ハ透〳〵ふ〳〵



なり

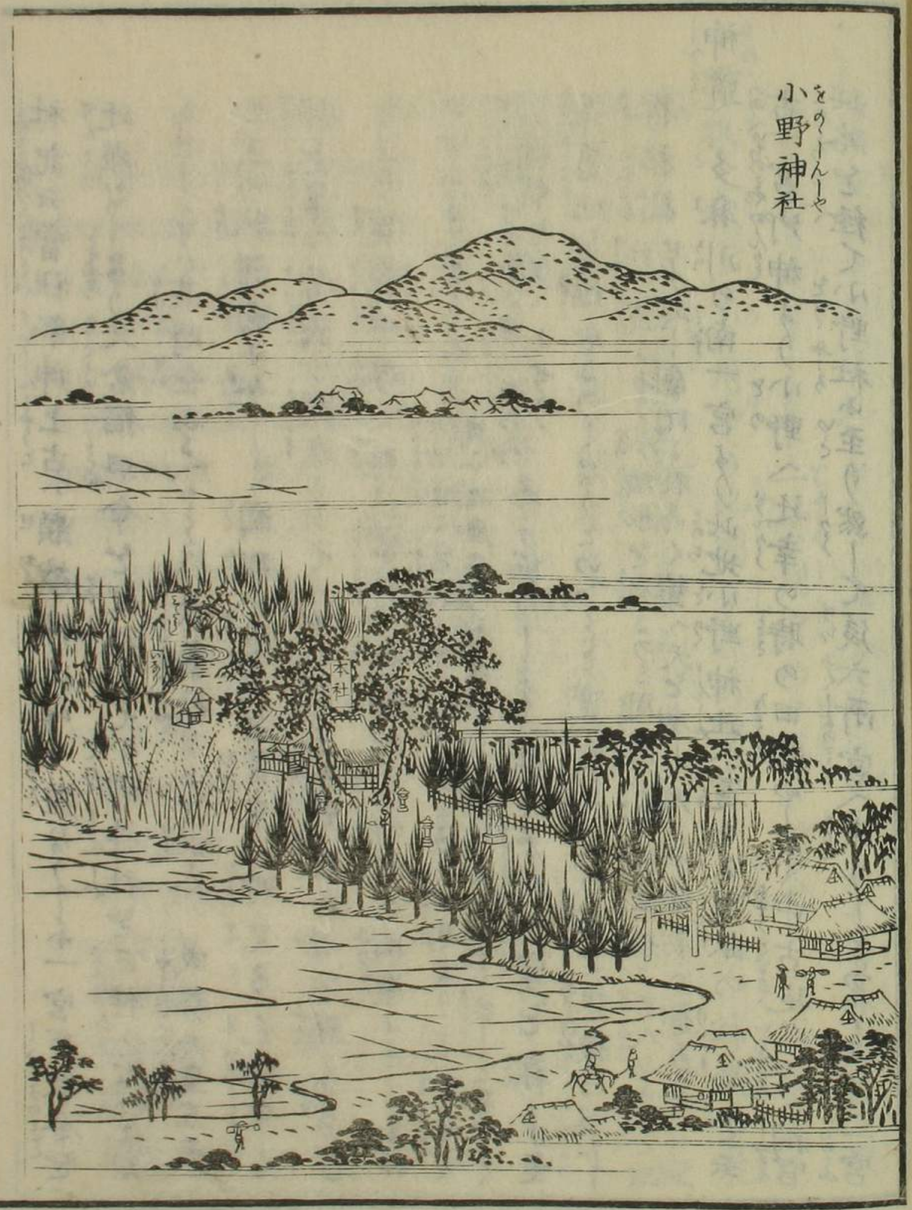
三千人塚　六所宮より南の方十五六町許を隔て道端よりあまり大ならぬ塚あり　上ひ其中二尺七八寸土より上ひ出ず　二尺八九寸埋めて有ん数石の古碑を建つ　此餘ハ土中ひ埋めて有ん歟　此碑ひ文字一字も見えず　先の年縣令の下知よりて此石碑を堀ひ出し文字を鐫り埋めもとの如くせしひ三千人の亡骸此地に埋めて限を築く〳〵しとぞ　此地里正の口碑ひ傳ふ三千人の亡骸ハ此地小野宮内府重高と云ふ人此地に西慶寺を建立して討死せし人の墓なり　文字ハ永禄年中の合戦ひ依て埋めしなるべし

代小川　府中の南を流る西の方二里あまりを隔て青柳村より多摩川の水を分ち此辺耕田の用水とす　小川の変称なるべし　或人云古此地を小川郷と号ひ今の代小川ハ即往古の小川の変称なるべしと

## 古蹟

按ずる慶長年間官府より六所宮へ寄なされし書の中ひ六所宮川堺ひ注されしハ此項多摩川の水流数條ありしを慶長以後堰を築ひ依再按ずる今小野宮耕田と唱ふる地勢と川筋と古ひ異なる事なし　土人高田と字ひ同じ南を中河原と号ひ川を隔てゝ後とす

## 陣街道　小野宮と分倍との間の耕田の地ゆゑく府中本町より関戸へ行道の名とす　昔奥羽等の國〳〵より鎌倉或ハ大磯抔への往還ひ道ゆゑて鎌倉より北國東國へ軍勢を向らるゝ頃の通路なり〳〵



小野神社



武藏國風土記曰小野神社圭田五十六束三字田

小野神社名帳曰多磨郡小川鄕

多磨郡八座

小野神社云天皇紀元慶八年七月十五日癸酉授武藏國從五位上小野神正五位上云

代實録光孝天皇仁和元年甲午始行祭禮有神戸巫戸等云云

喜式神名帳曰多磨郡小野神社云云

所祭瀬織津比咩也天照大神荒魂也

小野神社舊址小野宮村陣街道の右ふあり今纔祠を存するのみ

六所宮の条下お詳し合せ見べし

古街道と唱ふ

北田間の塚ハ中古の甲州街道府中より日野へ往還の一里塚ゆゑ今もその野狹

開發の始ハ瀧田數五反程ありしとぞ土人五反田と字せりとぞ又小野宮の

小野縣と称せしより是なり今ハ府中の舊名となるより和名類聚

抄に多磨郡小野乎乃とあるも此地墾田と成りし八元亀天正の頃ゆゑそ

墾ら家數三十軒もありの小野ハ上古郡村定らざる時よりの号ゆゑ

間なも小野宮とよくも

小野宮村陣街道を隔てゝ分倍より艮ふ當る地をもふかく称せり

社記云當社祭神上古ハ瀬織津比咩一座なり〳〵小一宮下春命を
迁座なし奉り又倉稻魂命を配祀〳〵そ小野神社を三神となし奉ね
らせ〳〵るハ其時世もろ〳〵〳〵最舊社なるを以〳〵 成務天皇五年
乙亥の秋諸國ゟ令〳〵〳〵國郡ゟ造長を置るゝ時兄多毛比命も
詔をなり當國の國造とし〳〵て此地ゟ至〳〵小野縣ゟ府を爾〳〵さめひ
〳〵より後崇敬厚く再ひ當社の御神を六所宮の相殿ゟ迁〳〵まね
らせられしとぞ〳〵六所宮ゟも客來三所と称するハ即是なり下春命も
下春命を第一とせり
其舊址を標するのこなりとぞ〳〵實ゟ千載の古を想像つ〳〵
擎拈樹 社の後よりあり今蟠根を存るのこ周圍十尋計其根上百人を座
せしむ〳〵藥既ゟ枝高く聳へ天を摩し殆二千餘歳の想あり
神道 多麻川の南一宮より此地小野神社へ通る田畝の徑路を云
古一宮御神より小野へ迁幸の時の旧路ゟ〳〵中古迫ハ一宮の祠官
此路を経て小野社ゟ至り然〳〵して後六所宮へ来りしとぞ〳〵其項ハ一宮
より空輿を舁来れるゆゑ
まて送迎せしより一宮祠官の口碑ゟ傳ふ
小野牧 今のふ所ハ府中の北國分寺の邊より小川砂川の間の農
田となり〳〵地其牧の舊跡なりと云傳ふ
名の条下往古當國の國造年〳〵八月ゟ至るハ此地ゆく駒を撰て
詳なり
鳳翩ゟ齎〳〵くるとなり公事根元ゟ八月廿日武蔵國小野御馬
四十疋を引ることのも

拾芥抄曰 中行事部
八月 又 武蔵小野御馬云〻
二十日牽牧名立野
又 延喜式曰
同書 石川牧 小野 秩父 已上武蔵
九月十日國司與牧監若干當人
仕別當牧檢印共署其帳簡繋
臨牧監等貢
良明年八月附
調
用着
堪仕野牧
充
驛傳馬下略

延喜式曰 右御牧信濃四牧 諸牧監濃歯等若干
石川牧 由比牧 駒牽者毎年貢上
武藏國 左右馬寮 武甲歯上者充仕丁

又 同上書曰

凡年貢御馬者中畧武蔵國五十疋諸牧三十疋立
凡諸國所貢繋飼馬牛者二寮均分検領訖移兵部
省其數中畧武蔵國馬十疋下畧
此余北山抄西宮記中右記猶多外ありと雖
年中行事奇合
むさし野をうけこす駒の数うたがふ
なし延喜式に小川牧とあるものこれ則小野の牧の
惣称ゆゑに府中古小川郷に属せしや武蔵國風土記
にいふ小川新田とうたへるもの小川より渺く東の
ほうを遠う望の西北にあたりて今小川と称する名
なり
諸源山称名寺 府中番場宿北の横小路の右側よあり時宗
相州藤澤の清浄光寺ゟ属せる恵心僧都彫造の阿弥
陀如来立像三尺八寸あり 霊佛を安ぜし此地ハ往古六孫王経基
居舘の舊跡なりと云伝へ中古ハ正明ゟ作る今称名ゟ改むる其後
一光道和上人當寺を草創せし 應永元年三月七日寂
再興ありしとぞ當寺ゟ古き大鼓の胴を収む尤古物にして
内ゟ年号等を記せるものなれども文字讀ミ
難ゆゑ往古の陣太鼓ならん 頓阿

龍門山高安護國禪寺 等持院と号六所宮御旅所より九丁ばかり
を隔て西の方甲州街道の左側よあり洞家の禪宗ゆゑ多く
麻郡二股の海禪寺ゟ属せる釋迦如来 佐文一尺五寸半 服士文殊普
賢の像 賢俊法眼の作なりと云當寺ハ俵藤太秀郷の開基
ゆゑて秀郷の宅地の旧跡なりとぞ
中興あり故ある氏公の法号を採て等持院と称せ則尊氏公
将軍の肖像あり 當寺其先ハ市川山見性寺と号せしを當寺を秀衡
居住の旧跡の故ゟ然称せしとぞ
揃へる形残れり 開山ハ大徹心悟禪師と号ス本堂ゟ武野禪林の額あり
筆者詳ならず
藤原秀郷靈祠 境内坤の方ゟあり今稲荷明神ゟ勸請せし
此地ハ秀郷の宅地の旧跡なるゟ而已
辨慶硯水井 堂後の竹藪ゟあり 大般若経を書写せし弁慶此井水を汲んて硯の
水とせしゟ然称せしとぞ又弁慶の画ける経ハ焼失せしを
畫きし掛幅あり 絹地ゟ甚古雅なるものなり又ゟ弁慶机ゟよりて経を書写せる
架ゟ糸の搦をも弁慶搦と号け東の坂を弁慶坂と呼へり西北の方甲州街道ゟ
あるゟ而已多くれども弁慶ゟ肉ハ水戸黄門光國卿の撰ゟひし

史あり〳〵除きまひ〳〵を名あり〳〵実なく證ともつきなけもと

觀音堂 表門を入て正面よりあり 觀音の像ハ佛立像七尺あり左右六觀音の像ハ何れも四尺五六寸あり 作者詳ならず

當寺ハ足利家の再興より 永德元年鎌倉左兵衛督氏滿小山義政退治として發向ありし頃も當寺を陣座を儲けらる又應永六年ゟハ左兵衛督滿兼周防の大内助義弘ら京都ゟ於て逆心を起せ〳〵時同十一月廿一日京都のゟ合として當寺ゟ動座なしゆひ同三十年癸卯春も又常陸國の住人小栗孫五郎平滿重ら謀反ゟより鎌倉より持氏公結城へ發向同年八月小栗落城の後同十六日當寺ゟ帰座同三十一年十月廿三日當寺炎上ありしゟハ同十二月十四日持氏公鎌倉へ還御ありし 當寺什宝の中ゟ往古ゟる氏公陣中ゟそ用ひられしと云古き洞羅一口あり 近頃紛失なしたり 今ハそんせず

石上山弥勒寺 般若院と号ス高安寺より六町あまり西の方同し街道の右側ゟあり 真言宗ゟて府中の妙光院ゟ属を開創ス

始久〳〵く今ゟ〳〵ゟふあり〳〵永正二年乙丑擢大僧都法印良弁中興を本ゟる大日如来ハ一尺斗の座像ゟ〳〵く作者未詳當寺ゟ

津戸勘解由左衛門尉菅原規繼墓あり

墓碑如圖

津戸勘解由左衛門尉菅原規繼
子 尅死去
沙弥道繼

延文五年七月十日

按ゟ此勘解由左衛門規繼ハ津戸三郎為守の氏族なるん為守の墓ハ八王子の觀池山大藪寺ゟあり今ハ幡宿の農民六右衛門とゝるものあり津戸氏其遠裔なりとの

谷保天神社 同し街道西の方谷保村道ゟより左側ゟひり 北ゟハ分倍在栗原郷と云

別當ハ安樂寺と号ス祭礼ハ毎歳二月と八月の廿五日又三月十五日ゟハ開扉あり十一月三日ハ當社往古天神島と称ふる地ゟより今ゟ地ゟ迂座なし〳〵緣あゟり此日ゟ小菜供を献備ることゟり

本社祭神天満大自在天神一座神躰ハ菅家第三嗣菅原道武

谷保天神社

社内に常磐の清水と称する霊水あり

清水立場

甲州街道の立場ゟ
して此辺てかこ
清泉涌出るゟに
清水村の称あり
云此地ゟ酒舗あり
て右前清泉沸
流を夏日ハ索麪
を湛して行ゝ饗
應せり故ゟ此地
往来の人こゝゟ
憩ひて炎暑
を避さるハ
なし

朝臣の手刺なり

額　天満宮　後宇多天皇勅世尊寺経朝卿筆

額の裏ゟ左のやきの二十四字を刻せり又外ゟ同し額の写し一枚あり水戸黄門光圀卿ことをき納なしとそ裏書ゟ元禄三年庚午眉毛軒河埜門敬敷の筆せられ額の背面ゟ曰

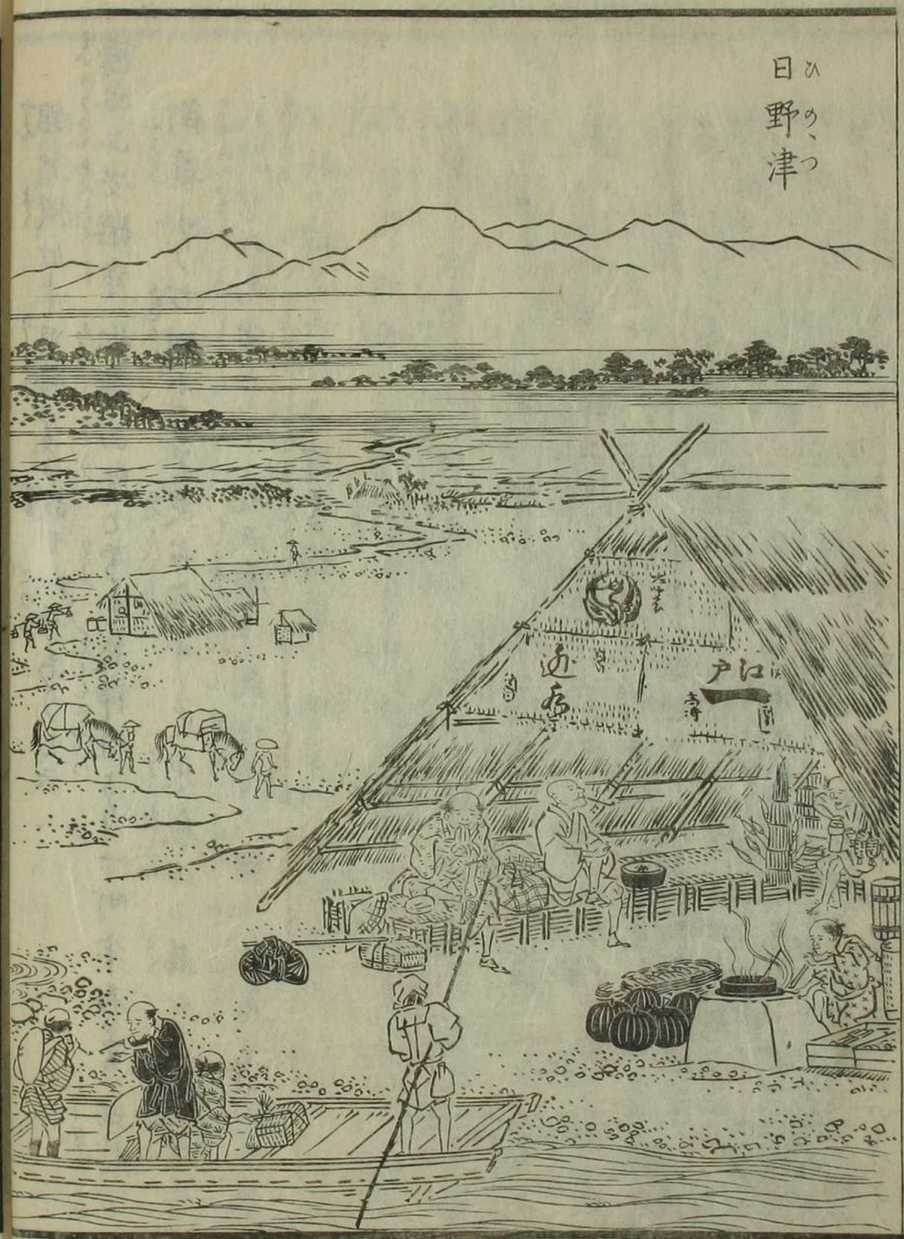
建治元年己亥六月廿六日乙丑書之

正三位藤原朝臣経朝

常盤清水　裏門出口道の端ゟ池あり中島ゟ弁財天を安置を清泉湧出紫の僧某當社へ詣し項和哥を詠せり延宝年間筑本地堂　本社の右の岡ゟあり本尊十一面観音の像ハ慈覚大師の作と云　道武朝臣霊社　本社の後ゟあり土人三郎と称す

社傳云昌泰四年菅公筑前の太宰府へ左迁の時卿三男菅原道武朝臣も又此地ゟ流さるゝさせをひ三年の星霜を経をひしゟ延喜三年二月二十五日父君菅公筑紫ゟ亡あひぬとて悲歎のあまり配所の徒然ゟ父君の御像を手親摸刻しをひ旦暮在ろ

如く事へ茅道の誠を尽さるゝ
となり　昔ハ大社ゆゑ僧房も多かりしと
坊松本坊滝の坊以上六坊中古迄も猶残
今ハ滝の陰と号る一宇天暦ゟ至りてハ
のこり存せり是古の滝の坊なり　村上帝狛犬一雙を寄附ア
ゆゑに今猶存せり　甚古物又大般若経四巻を収む源義経朝臣北
奉納なりと云　伊勢三郎亀井六郎ひ弁慶等の
四人書写ル私の経巻なりと云
菅原道武朝臣舊舘地　同所二丁許南よあり　空堀城門の跡と覚し
き所も存ぞく四方二町あまりゟ封境なり　土人三郎殿屋敷跡と称
す相傳ふ三郎道武此地ゟ住し　当地の縣主上平太貞盛の女を娵
一子を得さり其子を菅原道英と号　夫より六世の孫を津戸三郎
為守と号くるとも　津戸為守の事ハ安
楽寺の条下ゟ詳
道武主　貞盛の女を
娵りくるゆゑ茲ゟ未考
假家坂　同所安樂寺の門前百歩計街道の西の方へ向ひて上る坂を
云建治二年奉幣使此谷保天神の宮へ下向ア頃假ゟ旅
館を設けし旧跡なる故ゟ此号あり
梅香山安樂寺　松壽西院と号也　天神社より一町半あまり西北の方
街道より右側ゟあり　東嶽山ゟ属せり　當寺を
天満宮の別當寺ゆゑ天暦年間法圓大僧正開創せりと云
中ゟ奥ハ津戸三郎為守ゟ願なり　本尊阿弥陀如来ハ法然上人の
作ゆゑ座像一尺五寸計あり　佛躰の中ゟ為守注ゐる所の血文を
収むると云其余什宝ゟ為守の
中ゟ篭ありと云　薬師佛あり　傳
教大師の作と云　像材ハ沈香ゟ
して十二神将の像迫悉く高サ一寸斗七厨子の内ゟ造り篭られ
ゟる　津戸三郎為守の墓ハ八王子の市中観池山大善寺ゟ十八町半
順誉とゝく者造立ゐる石碑なり　又為守
常石田とゝく地ゟあり　今ゟ八幡宿の中ゟ
為守ハ法名を覚願と号を文章博士菅原孝標常陸介ゟ従ア下國の時武蔵
國の傳迫捕使扶父権守平重経娵
其三男為守生年十八歳ゆゑ治承四年八月石橋山の合戦ゟ
馳参しゆゑ朝公の旗下ゟ属し度ゝ軍ゟ忠を顕し
名をあけをとゝく




なり建久六年二月南都東大寺供養の為将軍上洛の時供奉して同三月洛に入同し廿一日法然上人の庵に参り念佛往生の道を承りて法名をつく〳〵く念佛の行者となり建保七年竟に出家をとく〳〵先上人より贈られ給ふの同十一月十八日結願の夜は穢土の住居卑益なりと高声に念仏し初夜の七五臓六腑を取出し陳大口より包忍ひく後の河へ捨させまるれとも夜闇のなりとハ人更に知るなし〳〵されとも苦痛なく十九日に至りそも猶臨終の心地かりければ息男民部太夫守朝に此事を告るまゝより始く人も参りつゝ翌る四年の正月十三日の夜愛に来る十五日午剋に上人より告ありつゝ西に向ひ端座合掌し高声に念仏し午の正中に息絶ぬ紫雲空に靉靆し異香室に薫を掛ること五十七日気力常のまゝにて往生をとけ給ふ世以て消息なく〳〵ひよ念珠袈裟衆ホを相傳しつゝ彼露とも彼子孫上人の特を載るのみ唯是る頼ろ不思議の奇

## 玄武山普済禅寺　日野渡口より此方の岸頭を右へ十丁斗入く芝崎

村と云よあり　此地を立川と云昔の郷の名なり今ハ小名となりぬ

建長寺ハ禹せり開山ハ真照大定禅師物外可什和尚と号す　寛元二年癸卯十二月八日寂す　本朝ハ正観世音座像二尺斗あり左右に禅師の墳墓及び肖像あり

十六阿羅漢十大弟子等の木像を安置共に作者詳なり〳〵中

## 奥大檀那ハ立川宮内大輔と称す　法名ハ宝山道貴大禅定門と

## 芝崎普済寺

寛永年間の開山文誉上人の時の六面石塔と称せり

一、靈牌ハ當寺ニあるとも其墳墓の所在をしらず
佛殿惣門の内ニあり本ハ釋ゐんゝて座像三尺許あり服七
文殊普賢二尺斗共ニ作者をあらす
一、其記ニ平重能平義親平高親等の名を記せりとぞ
五十嵐市左衛門感状曰

景虎陣ニ出陣ニ砌三田彈正忠政定先陣而大幡ニ
陣所八王子塚ニ北条氏照ニ及一戦候ニ所五十
嵐市左衛門竹田新八郎ト云武士ヲ討ニ二番着到
賞功不跡時芝崎三十貫文所ヲ被仰下者ヤ
依ゐ如件

永禄三庚申年三月七日　立川宮内亟能在判

開山大定禅師真像座下之記曰
彩色啓端造立助縁芳衛辨翁啓範宗來啓一宗華
宗義啓端宗順啓勝宗範啓壽壽性了宗宗快翁
塗師行盛佛師上總法橋朝宗幹縁比丘啓達
應安三年戊十二月三日敬記

當寺境内北の方ハ往古立川宮内大輔某の宅地たりしとなり
數年合戦の地ゆゑ〳〵今猶林中ニ首塚と称するものある八年謂ゐ
一族ゐゑ〳〵
と云　今も墳の跡と覚しき地存して矢の根の類の武器を
又慶長の頃立川義賀なる人ありしと云宮内大輔
豊太閤の朱章ある證状をゐ
御開國の砌寺領を乞奉り朱墨をゐゐ又宮内大輔為討伐
佛閣を放火なゐひ靜謐の後ハ修理をくゝとある
後住持覚栄宗理天叟の弟子
天叟の事を愁訴もる先ニ御加増あるくき
旨被仰下ものゝとも遅くもる先ニ先栄和尚改衣の為上京ゐし
途中迂化せり
後久〳〵く無住の寺となり朱章を欠と云然ニ
寛永の末住持大年といゝる僧當寺ニ住せしニ故ありて廣福寺
といゝるニ退去せゝると什宝の古文書古器の類を悉く持し去れを

と云ふ今八寺の朱章を傳へ存するのみ

日本年代配合鈔曰

永正元年甲子九月廿五日立河原於山内顕定扇谷上杉朝義合戰朝義軍敗テ太田下野守為始多兵死ス

南朝紀傳康正元年巳亥四月廿一日鎌倉成氏と房顕ハ定政上杉長尾景中と武州立川原に合戰云々

小田原記云永正元年甲子九月廿七日駿河の今川氏輝并小田原の松田左衛門尉憲秀加勢ありれハ此勢を合せ扇谷の五郎頼良大将軍として武州立河原へ陣營を布山内の管領上杉民部大輔可淳入道并當屋形憲房東八州の軍兵を催し押寄たゝかふ夜ふ入れハ山内の加勢とし〳〵越後の軍勢共ハ河越の城を落延梅酸の渇をやすめんとうち朝良あ〳〵そらもたゝかひ

普濟寺境内六角古碑

高サ五尺三寸　巾一尺四寸計

六面塔　卵塔の中ほあり高サ六尺ほかり一片の幅一尺五寸あまりひつくり前面の二枚ゆを金剛密迹の二王を彫刻し後面左右の四枚ハ四天王の像を刻せり上の方ハ何れも宝尽のめでたきものを鏤て極めて巧作なり増長天の一片ハ戰号等を刻せり文左のごとし

延文六季辛丑七月六日　施財性了立

道圓刊

那羅延堅固

密迹金剛

増長天王

按ふに前ふ挙ふる所の岡山大字禅師肖像座下の記文ふ性了の名あり六面塔の財主性了なるべし延文六年ハ東安と改元の年ゝ應安三年ふ至るまでふ十年なり然れハいよ〳〵此人なるべし

多聞天王

持國天王

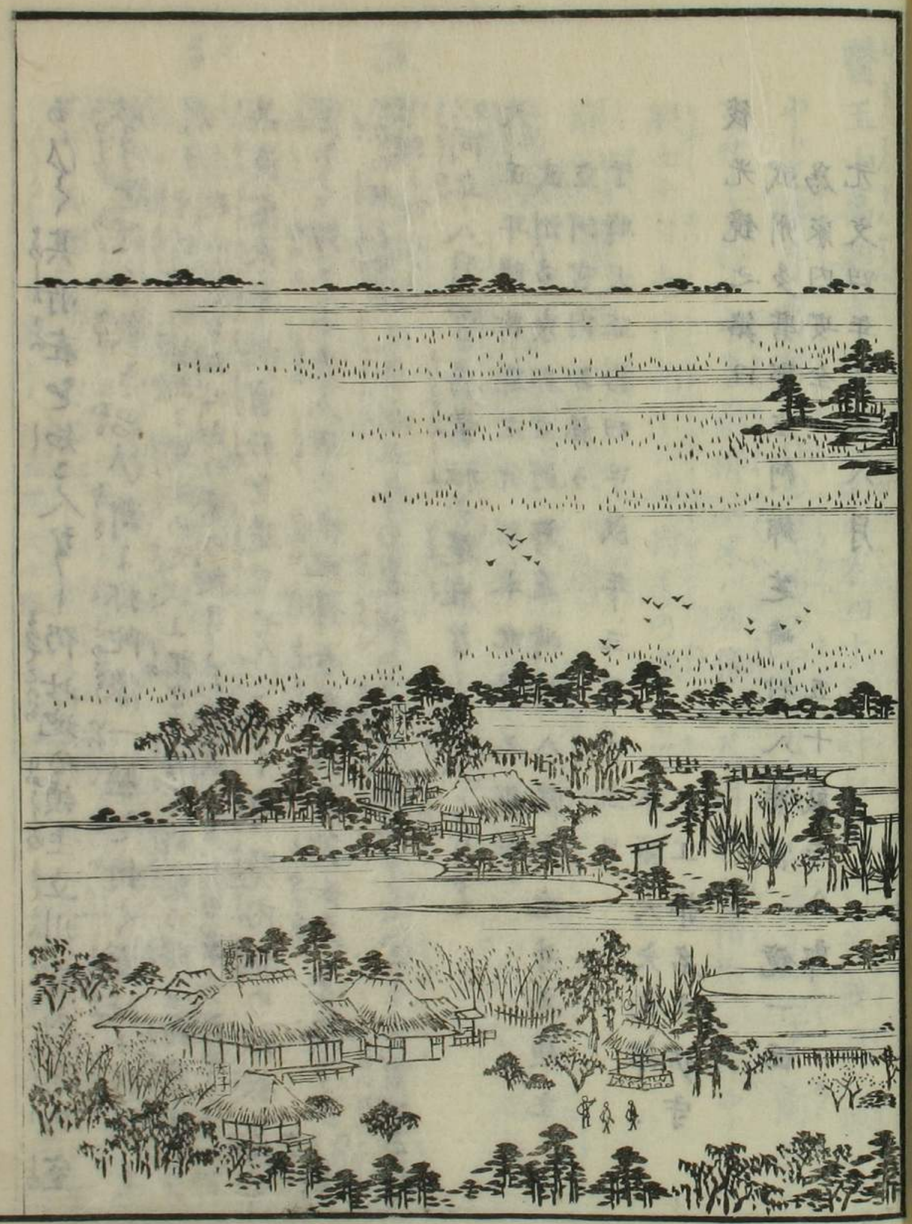
廣目天王

當寺境内の地ハ多摩川の流水臨を勝景の地なり富士箱根秩父郡の遠嶂等も一望ゐ遮り尤幽趣あり北の方ハ往古立川宮内大輔某ゐ城営の旧址ゆして其形勢を存し懐旧の情を催さしむ又小田原の北条幕下なりし五十嵐小文治といふる人も此地ゐありし由土人云伝へしより前ゐ顕せし永禄三年の感状ゐと五十嵐市左衛門といふる名を注しより何ゑも其氏族の徒なるべし此故ゐ今も此地に五十嵐氏の人尤多しあやまり伝へしる歟

（裏書）
五十嵐小文治ハ和田合戦ゐ朝比奈義秀ゐ討れしる人なり是を混しく土人

八幡宮　同所二町そらも北の方ゐあり神主宮崎氏奉祀を祭神本多別命一座相傳建長四年癸子八月十五日勧請せりと云本地佛ハ阿弥陀如来ゆして黄金仏長丈四寸八分ありく弘法大師の作なりとぃふ
（裏書）
背面ハ假面の如く甚古色なり然るゐ俗後光佛と称もるゆへ是を混しく
天正年間野火のるゐ神殿烏有とあるより此時ゐ至りて失

立川
八幡宮
諏訪社
満願寺



ゐひく其所在を知る人なし仍此地の領主立川宮内某の室
此事を深く歎き思ひ新に弥陀像一軀を鋳く當社に収らるゝと
いへり佛躰の背面に鋳所の文次に記せり按に新像の膝に梅鉢の紋あり
疑ふらくは立川氏の家の紋なるべん欤或は其室の家の紋なるべん欤
其後室永年間宮社を造立せんとせし時境内松の枯株の根を
穿ちく勘下に失ふ所の本地佛金像の弥陀如来を得たり時の
の双の跡ある像の又安永五年の夏賊の為に奪ひ去られしことも霊威あるを
以同年八月曽再當社に還座なしまつるとなり

天正年間新造立所之本地佛之銘曰

武州多東郡立河郷芝崎村八幡本地并與願主

立河宮内お孫ろ

于時天正拾四甲戌年三月十五日

本願大夫式部

大工推名土佐守

後光鏡之銘曰

武州多磨郡立河郷芝崎村八幡宮

為家内安全

元文四年己未八月

五十嵐与八郎



醫王山萬願寺　同所南の方四十歩計を隔り黄檗派の禅刹
やゝて錬牛禅師居住の草庵の旧跡なりしを後小一宇の蘭若と
なせしとぞ本尊薬師如来八座像三尺計恵心僧都の作ゆゝしく
脇士ハ日光月光十二神将等の像を安せり

醫王山
額本堂内家帯
額向拝より掲く當寺中央別に掲る南無悦山筆

東光院
額左右聯の掛物黄檗高泉の筆なり

新度悪水を大地世外業州
産安垢浄通法界悉皆獲福

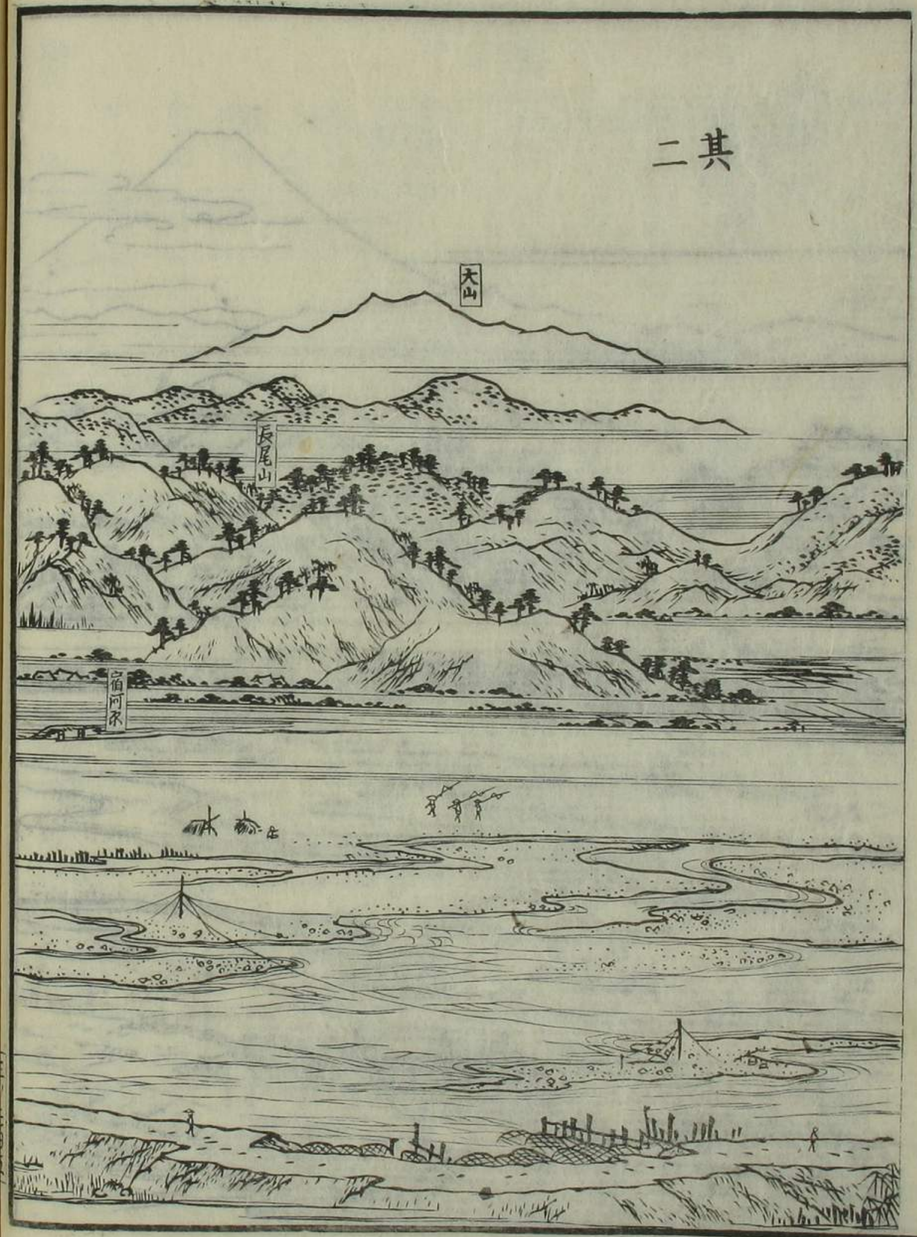
諏訪社　八幡宮より六十歩斗東にあり祭神建御名方命一座相
傳ふ弘仁二年辛卯七月廿一日より勧請せしとぞ當社も宮崎
氏奉祀帯奉祀す

多磨川　當國第一の勝槩とせり和名類聚抄多磨と作り太麻と訓す
編多摩とす後世玉ハ作ることのハ山城摂津ありひ紀伊近江陸奥等の國くまある
所の玉川と共ハあらせく六玉川と称せしより文字をあやまりしなり
此川ハ武蔵の國丹波山より発し多摩郡の丹波村より流て玉川と称せ
とぞ日蓮上人注画讃大士臨終の時地上より移ふ条ハ武蔵國田波何

多磨川
六玉川のひとつ
あくがた多摩を
耳よ假る

高尾山
菅村
矢の口渡
中の島
登戸
宿村

# 其二

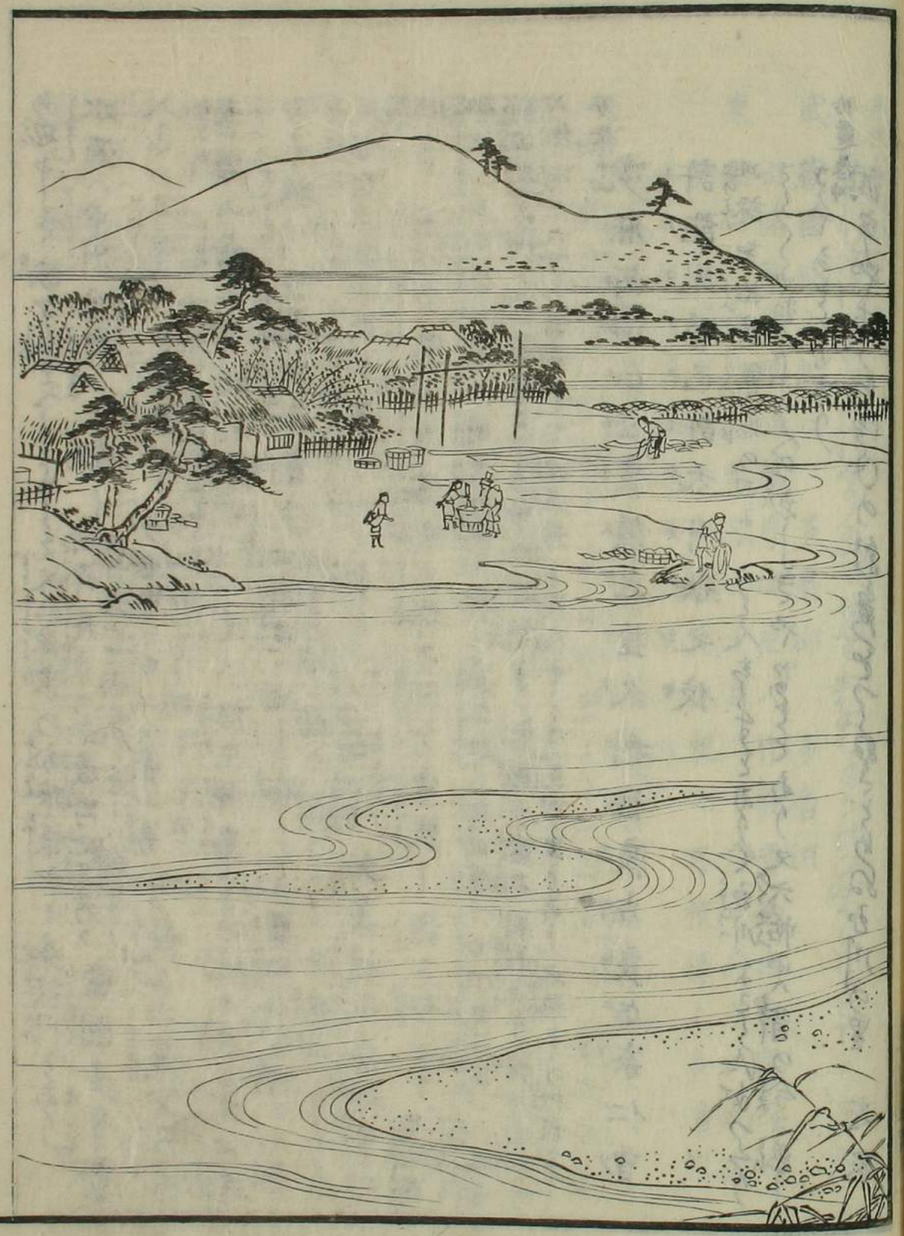

大山
長尾山
酒匂川

玉川ハ砂場ヲ横
斷ゆゑ其流れ
一帯まあすゝ多く
雨後抔ハ渡口
秘傳にて定まり
あり西北ハ秩父
をよび甲州の諸
山を望み東南ハ
堤塘の斜より連る
を見る鮎を此川
の産とす夏秋の
間多しとかや常
ハ漁人絶也
厩村
馬井

玉川の鵜飼の鮎

大木
津の内
親王
家の会

舞人の
装束
うるはしき
玉川の
鮎ふる
瀬
よハ
え
ぶく
ぶく



拾遺愚草
たばこうや
さゝす
垣根は
多賀の城
ほとゝぎす
とふ人
里川の
定家

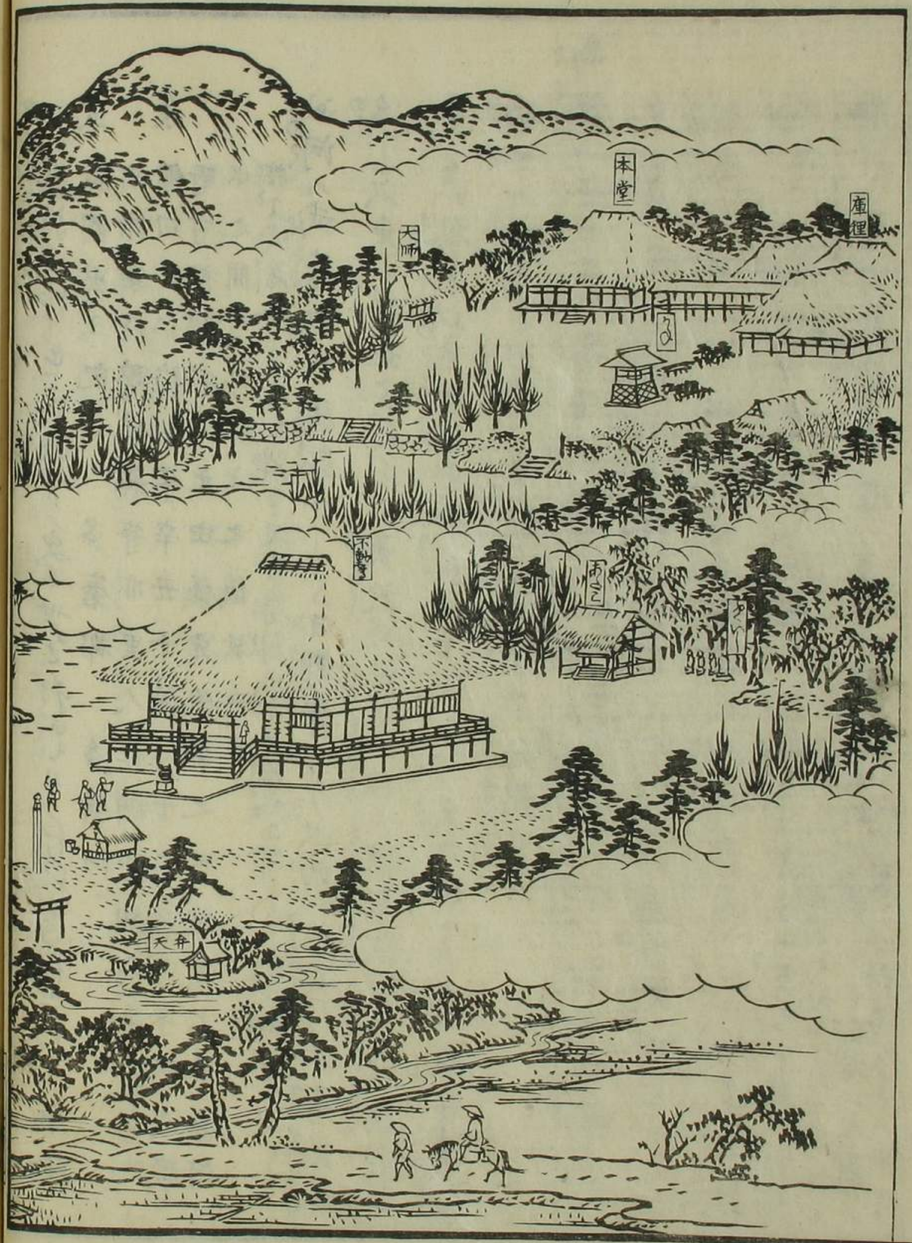
の辺やゝく滅を尓毛へゝとも又七條家の分限帳ゆゝと多波川とあり
水源ハ甲州丹波山より發し（田舎義帝の注武蔵と有ハ誤なり）當國多摩郡を
入くハ日原川も會流す（多摩郡日原山小菅山等より發すと云）御嶽山の麓を経く
青梅の南よ傍羽村（四谷上水の取口あり）及ひ福生拜島等の地ゟ至る又此地
ゆく秋川の流も落會ひ（甲州境の地より發して多摩郡伊奈村五日市村等の辺よ傍て流ゝとの秋川なり）
又石田と云よ至り浅井川も合（八王子の山間より出る）和泉村中島村等の
地より末ハ多摩荏原橘樹三郡の間を東流し海よ會せり（橘樹郡
登戸二子小杉平間河崎等の地よ傍ひ荏原郡ハ瀬田等く力下丸子矢口ハ幡ヶ塚
羽田等の地よ傍ひ流ゝとの方ゝ甲州國境より當國多摩郡羽村迄十餘里羽村
六郷迄十六里と云武蔵野地名考よ周流もゝゝの凡四里とあるハ水源よりの行程なるへし）

万葉

多麻河泊尓左良須氏豆久利佐良左良尓奈仁曽
許能兒乃己許太可奈之伎

此詠を拾遺集意の巾よハよゝ人ゝすとありて此川よゝんで
ゝゝゝゝゝゝの人の名ゝやなゝとあり又六帖ゟハ昔の今よ
ゝゝゝゝゝゝ

高幡不動堂



なり予是を作〳〵と住持諾す依仁僧ハ一室ゟ入〳〵戸を閉て戸外ゟ出〳〵と
不日ニ造功畢ぬ意ゟ興僧ハ去て平沙方を〳〵を云〳〵室の地ゟ稲荷を勸請す

古鍔口一口　不動堂ゟ懸〳〵径一尺九寸文字
九十四字を刻す平銘左〳〵

敬白　奉懸
右尋當寺者慈覺大師建立清和天皇御願所第二建
立斗四陽成天皇彼時賴義朝臣自於登山奉崇八幡第三建立永意得
行霊両檀大檀那美作助真并記氏一宮田人鍋師源恒有
文永十年关酉五月北日　銀念西守氏　鐵青蓮

服石　不動堂の浪愛宕祠の傍ニあり巾六尺ニ高サも五六尺ニ
後諸の佛神ゟ来泊すとの〳〵石を拜ゟもハ験ゟ無ものと云ふ

二王門　左右ゟ金剛密迹の像を置〳〵

額　高幡山

僧浩然筆

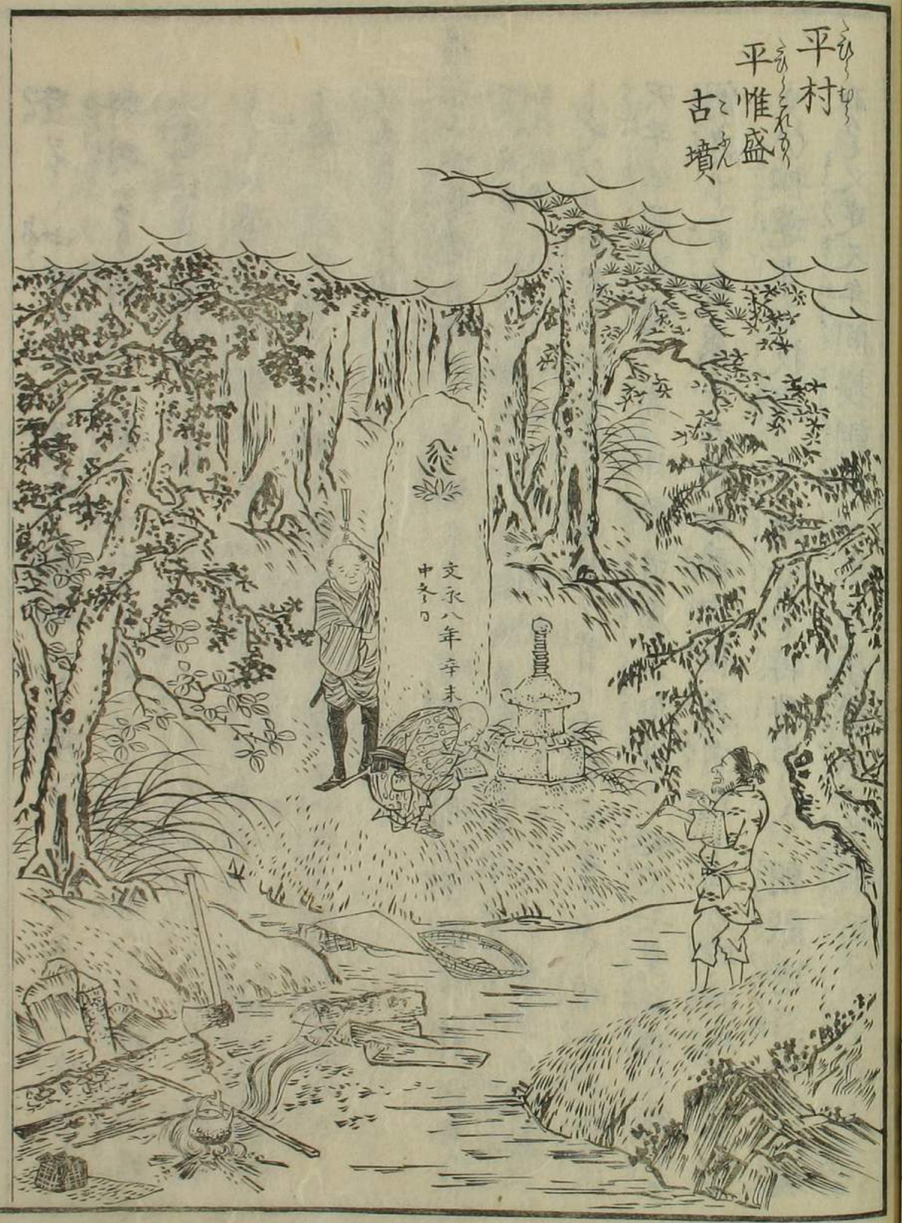
惣門　二王門の左ゟ並ゟ

額　高幡山

僧正泊如筆

鼻井　庫裡の前左の方の山の裾ゟあり貫サ七尺斗の井泉を云相傳建武二年乙亥八月
四日の夜大風発り声堂忽ゟ顛倒す故ゟ平地ゟ引下ゟとの〳〵頂ゟ鼻井と称〳〵阿伽とす諸人寒熱の二病腫物眼疾
等其餘諸病ニ或ハ飲或ハ其痛所ゟ塗りて平愈せ〳〵とのすなとの〳〵

鎌倉大草紙曰享徳四年正月廿一日武州府中分倍川原へ寄来る
成氏五百餘騎ゟて馳出短兵急ゟとり卻き火出る程ゟ攻戦ひ
間上杉方の先手の大将右馬助入道憲顯深ゟ負て引かへさる
高旗寺ゟ自害ニ鎌倉勢も勝軍ニあれとも石堂一色以下百五
十人討死〳〵戦ひ治り〳〵分倍河原ゟ陣を取云〳〵高旗寺とハ當寺
縁起曰平山武者所季重幼ゟり當寺の不動尊を崇敬〳〵世ゟ強
勇の名を顕せり治兼の頃平家追討の時ゟ鎌倉の右大将家ゟ
厲〳〵義経ゟ隨ひ〳〵西國ゟ趣き一の谷ゟ勇を輝〳〵武名世に
明らけ〳〵故ゟ平後當山の頂ゟ此ゟ堂を建立を然ゟ建
武二年乙亥八月四日暴風の災ゟ罹〳〵殿堂破壊を依後平
地ゟ〳〵なを其頃の財主ハ平助綱ゟ〳〵大中臣女等ありとの〳〵
尓来天下風水或ハ疫癘ゟるの諸災あ〳〵とをる時ハ佛躰汗を生
水切澤　金剛寺ゟり半町ゟ〳〵西の方の谷を云平季重御堂建立
の時此所ゟり堂材を伐出〳〵る旧跡ゟりと云伝〳〵




番匠谷 同一町程西へ入谷を云是も季重卿堂建立の時番匠の彫刻の地なりとのひ伝へ

別旅明神 金剛寺より三町程東の方別旅邑にあり此地の産土神とす則金剛寺奉祀の宮社なり傳へ云金剛寺の本尊不動明王の脇士二童子を彫刻せし異僧その像を造り終るの後立去らんとす近里の道俗喜悦のあまり其跡を蹟ひ此地まで来りるゆ件の異僧ハ忽ちかくれぬ貴賤奇異とし此地に一社を建立し別旅明神と称す地名も又別旅邑とのそ

平惟盛之墓 金剛寺より一町程西南平村平山村より農民又右衛門隣

といくる人の構の中にあり青き一片の扳石にて高サ七尺五寸巾二尺程厚サ二寸許ある上の方よきりく字を彫下に文永八年辛未中冬日とゑり土人相傳へて平惟盛の碑なりと云往古此地に平助綱と云武士住せ平氏の遠裔なるゆ是成造るゆ惟盛の菩提を弔ふ為ならん是成年歴を不審し或ハ又助綱ら墓なりとも云同し南の方二町ばかり山を

登ること中腹より又古碑あり剝落して讀へ〳〵只苔の一字のみ鮮明なり高サ六尺餘巾二尺そを下ハ土中より埋む二基ありしも高サ四尺ばかりなり土人平山季重或又平氏の人の墳墓と云傳へ〳〵分明ならず此所ハ農民平氏某ノ家累世の墓域なり康正年号の碑ありしと称し一説に平氏の人多く里正平氏の家より小田原北条氏直の下にて文あるとぞ

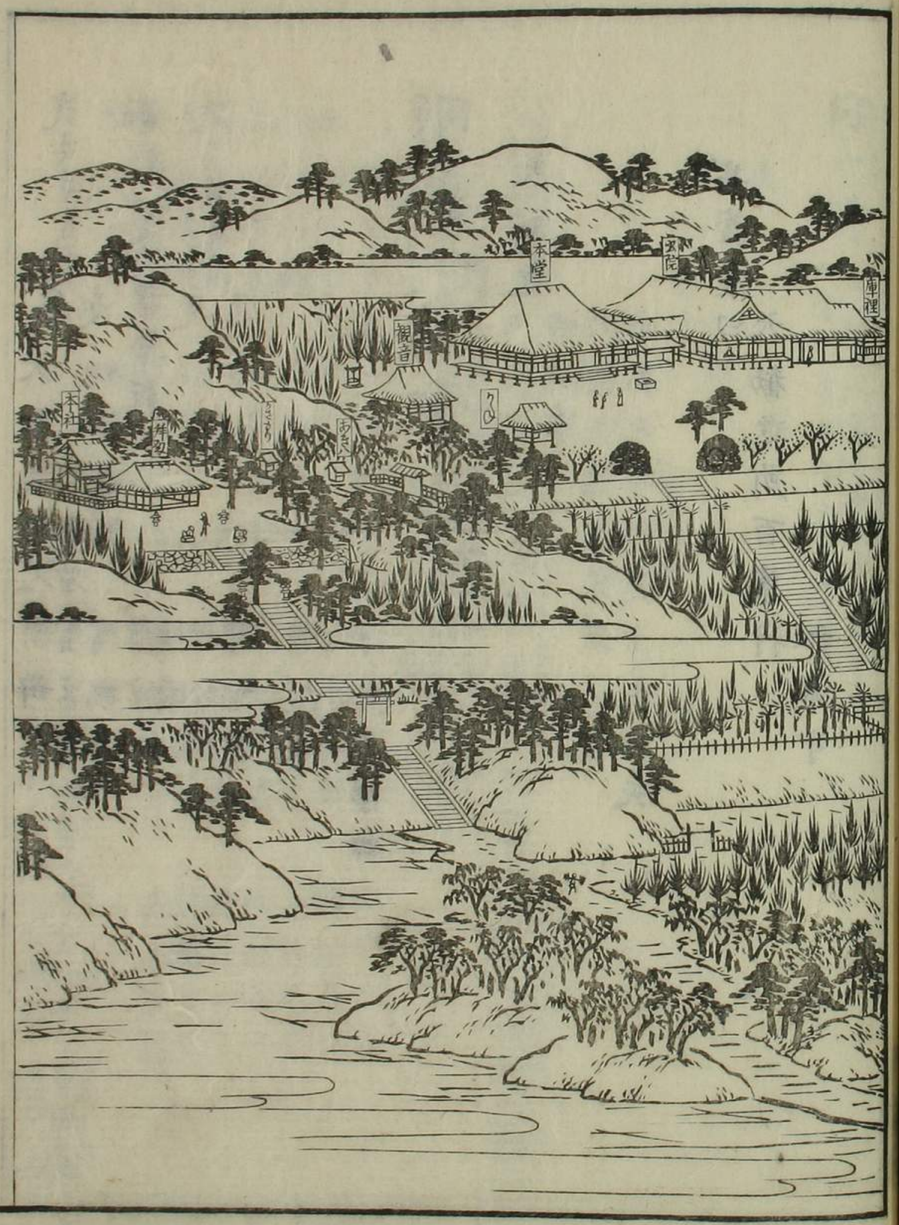
慈岳山松蓮壽昌禪寺　高幡より十二町許東南の方百草邑にあり昔ハ茂草より作る八幡宮社地より源頼義義家兄弟奥州征伐凱陣の時山号俗井を改めて増戚とすと云〳〵そ江戸白銀の瑞聖寺より屬せり昔ハ天台宗なりしが増井山と号し天平年間道璿の高弟釋道廣大勧進して始て七堂全備の精舎を創建す後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時此地をよぎりあひ松蓮寺より投宿して八幡宮を再興ありしが朝敵追罰の御祈願ありて又建久年間頼朝卿以来源家累代の祈願所と定られ建長七年當寺の住持祐慶相州より琳長師を請して禪院より改むと〻慶長十五年松蓮寺方丈建営の棟札あり本尊釋迦佛座像三尺斗あり脇士ハ阿難迦葉の立像三尺なり佛師藤村中圓彫造せる所なりと云

号せり　享保六年辛丑八月廿四日示寂　享保二年丁酉大久保加賀守忠英戻社夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基なり　元長尼ハ享保六年薙染して壽昌院慈岳と称せり

三宝を禁教し竟よ當寺を再興本堂内陣の額ハ松蓮壽昌禪寺の六大字及ひ總門額慈岳山等ハ何れも中興開山明慧極の筆なり本堂の前より揚る紫金光の額ハ隠元禪師の書なり

経筒　三箇其銘文左のごし一ハ銅を以製す長九寸二分口廣さ四寸五分

長寛元年大歳癸未十月十三日庚午
工匠藤原守道



茂草松蓮寺

大勸進聖人僧辨豪
如法書寫
大勸進結緣者僧玄久
僧觀賢
奉納妙法蓮華經
僧定圓
僧瑞久
僧定阿
僧尭尊
僧辨意
馭仕僧樂西

同一箇 銅を以て製す長七寸五分口廣さ渡り四寸一分其文左のごとし

大勸進
僧尭尊
大檀主藤原氏滿貞判
永萬元年九月十七日天

其蓋裏曰
大勸進所百草村
松連寺

同一箇 金銅を以て製す長五寸口渡り三寸一分其文左のごとし

奉
鈞命
日本幕下
征
建久四年
八月
一宮別當
松連寺
修之

八幡宮本地佛阿弥陀如来像 金銅一尺四寸あり土中出現の物にして佛躰の背よ鐫所の銘文あること左の如し

奉
為皇帝
御願圓滿
悉地成就
同共往生
大歲庚戌
日本武州
佛子
敬白冶磨金銅影像法体弥陀座 光三尺六寸
日本主君當國府君地頭名主
安穩泰平信心法主子孫平安
二親巨魂助成合力
平等利益建長二年
七日壬子南閻浮提
慶祐敬白
多西吉冨
真慈悲寺
施主源氏

銘文は真慈悲寺の号を注せり東鑑文治二年二月三日の条下よ武蔵國真慈悲寺ハ即称禅の菩提場なり因りとく

とも荘園寄附なるべし供具の備なく僧ハ衣鉢の財を失ふ
憐あり今日教上して當寺より一切経を安置し破壊を修理せよの旨
申請の間院主職を補せらるとあり又同書建久三年五月八日の条下ゆを
法皇四十九日の御仏事を南御堂に於て修せらるとあり又同書治承五年
悲寺より三口とあり又同書治承五年四月廿日の条下に小山田三郎友成多
摩郡内吉富并一宮蓮光寺等の地を自の所領なりと称し真慈悲寺ゟの頃廃せしや今ハ其旧跡さへ
吉富ハ此辺なりとされとも真

八幡社記曰建久四年鎌倉右大将家法華経を書写し金壺に入て當社に納
る所の打紙法華経の文字多くハ朽敗して僅に残るのみ其書写せる所の
井堂の後山麓にあり寺中
并堂の後の山の上にあり此所
八國見 本堂の後の山の上にあり此所
二王塚 松蓮寺より東南五丁ばかりを隔てる山間の小高き所に松樹十
株許茂れる地をさして称す此下を新堂と字のあり今礎石にこれ
のあり一地なるべし又宝蔵と唱る地もあり古大伽藍の経筒自然銅一寸
存せり古大伽藍ハ今松蓮寺より西の方山の中腹よりなり則松蓮寺奉祀の
八分の観音の像なりと云相傳東平五年源頼義義家両公奥州の夷賊征伐の時
百草八幡宮 松蓮寺より西の方山の中腹よりなり則松蓮寺奉祀の
を崇敬し得勝を祈らるゝ本社向拝の額八幡宮とす本社向拝の額八幡宮とす三
宮ゝゝ八月十五日を以て祭辰とす
字ハ梭小路大納言定福卿の筆なり寺僧曰正殿ゟ安置もの

神躰ハ八幡宮神宮王仁津戸明神武内大臣義家公等の木像
なりと云相傳東平五年源頼義義家両公奥州の夷賊征伐の時
山城國男山正八幡宮の社檀の土を穿もて石瓶ゟ盛来ゝ一宇の
社を造営して此地ゟ勧請なりしゝ願書等を収めらるゝ其後凶
徒悉く平け凱奇の時再此地ゟ至るゝ金銅の観世音の像
も安置し永く祭祀を不打ゟ傳へんとて観音の詳なり又此時五百
石の祭田を寄附且両将軍の随兵等も各軍功を祈り帯る処の
刀杖を収め神徳を謝せ尓来鎌倉損朝卿當社の神を崇敬ひ
あひ建久四年法華経を書写しゝ金壺ゟ入て奉納ありしゝ
星霜を経ゝ件の宝器散失せしを正徳年間二王塚の地を穿て
再ひ是を得しゝとのゟ寺僧云當社境内の樹木枯ゟ後ハ悪く
奥州の方へ向ゝ倒るゝの昔ゟ今ゟ至るゝあり是當社の
一奇異ゝゝと云

一宮大明神社

一宮大明神社　百草八幡宮より十五六町北の方多摩川の南岸一宮村にあり六所宮より一里あまりを隔つ　祠官新田氏大田氏両家より奉祀を祭神ハ天下春命なり後瀬織津比咩及び稲倉魂大神を合祭して三神一社三扉とす　祭神社今ハ小野神社と同し　舊事本記ゟ饒速日命此葦原の中津國ゟ降臨しまし時輔佐として隨駕しまして三十二神の其一神ゆゑ即三十二國ゟ分降ありて時信濃國へハ天表春命武蔵國へハ天下春命降臨なしまして國を開きまし

とぞ

社司相傳神代の昔當社下春命此地の止まりて後ゟ國ゝ神たちこれを祀りて今にいたる　扨或ハ又國の祖の神ゝなり給ひ命小野宮村小野神社へ遷座ありて倉稲魂命と共ゟ合せ祭る　再ひ六所の宮へ遷座ありて時世詳ならず　成務天皇の御宇國造兄多毛比命武蔵國多摩の地の府を治めさせ給ひし　後一宮ハ南國の祖神小野宮ハ同郷の旧社なりとハ誠に崇敬ありて倉稲魂命と共ゟ合せ祭る　再ひ六所の宮の相殿ゟ遷しまゐらせ給ひ　國社の祀を掛けられし　とぞ　又毎歳五月五日六所宮大祭の辰當社の祠官用中の至ると一宮小野三所の神輿を供奉しまゐらせ　扨又供奉しまゐらせ六所宮ゟ至ると神輿ゟ降りまゐらせ社の内殿ゟ奉盛を供し祭奠をなすを旧礼とぞ　元ゟ社なれハ一宮ゟ帰ると當

按ふ當社一宮の号旧史ふ所見なくと雖も地名を一宮と号祠をも一宮と称しくゝる開國の祖神第一ふ鎮座なれば旧祠なるべし依考ふるふ東鑑治承五年四月二十日小山田三郎重成平太郎貞ふ所領を自の所須ふ注しかねくと云条下ふ八多磨郡の内吉富なるひふ一宮連光寺なるの地名を我せ百草村松連寺所蔵の建久四年の経筒ふそ一宮別當松連寺と銘せりあるく時ハ建久のむく松連寺當社の別當しく依又高幡村金剛寺ふ存まるふの文永十八年の鰐口の銘ふも一宮田人鍋師源経有とゝくく一宮の地名往く見あくしてり一本擾一宮より南の方半町をかりを開て耕田の中よあり樹の木に注連を繞らせり土人百草八幡宮の一鳥居の旧跡なりと云此所より百草の八幡宮へハ半間凡十町をりあるし

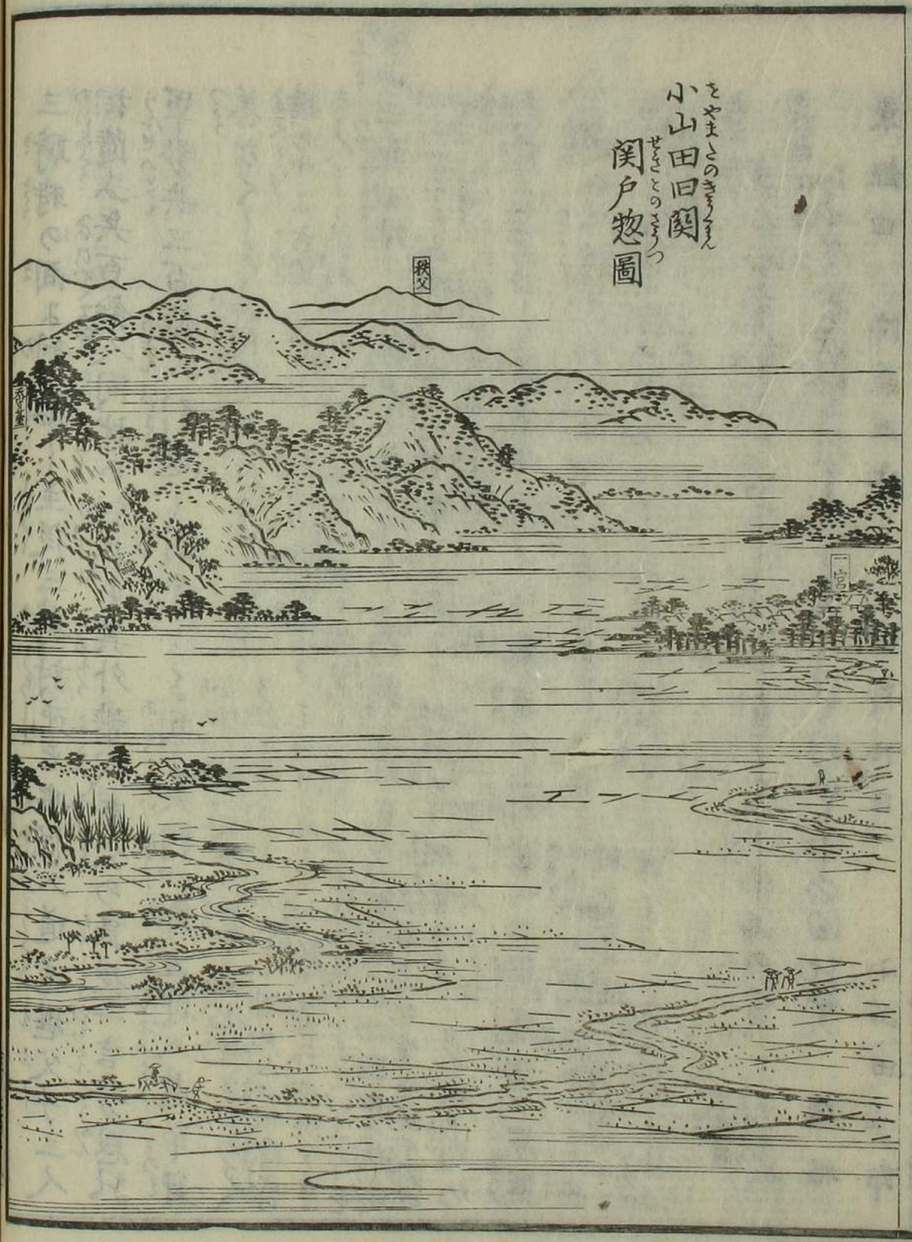
横溝八郎墳墓　小山田旧関の地より一町あまり西南道より右の方の畑の中ふあり塚上松槻等の老樹繋茂せり太平記ふ正慶二年五月十六日新田左中将義貞公武州分倍河原へ押寄るとの条下ふ四郎左近矣入道相模入道の舎弟大塁なりとも三浦ふ一時の謀ふ破られて落行塁ハ散くふ鎌倉をさ〳〵て引退く討る者ハ數を不知大将左近入道も関戸辺ふくく已ふ討れぬ〳〵く見えそるふを横溝八郎踏止りくく近付敵二ト三騎討死を射落し主従三騎討死を安保入道道堪父子三人相隨ふ兵百餘人同扰ふ討死せを其外譜代奉公の良徒一言芳恩ふ軍塁共三百餘人引返し討死しくる間ふ大将四郎左近入道ハ手身悉なくく山内迄引れくとの構の中ふ古墳あり上ふ槻の古樹茂れるとも今ハ是非をとゝふもなし則これなり相澤氏の説ふ安保入道の墳墓ともいへり

小山田開旧址　今関戸と称せるとこれ旧址なりと云按ふ此地ふ天守臺と云所あり眼下ふ玉川の流を平臨し又遥ふ上下野州近一望ふ入南岸よそひくく古府中より帝都及び鎌倉への街道あり東奥北越の二道共ふ此地を往還せるハなりし今ハ邑名よのく残まれる此所より二里ばかりて南の方ふ小山田村と称せることとあり

夫木抄　或為世卿
　　六百番寺合　　人名
　　ひくのハ為世ふ仕へそゝこゝ小山田の翼　顕昭

東鑑曰　治承五年
四月廿日　　小山田三郎

小山田旧関
関戸惣圖



六百番奇合

頭昭

重成聊背御意之間成怖畏篭居是以武蔵國多摩
郡内吉冨并一宮蓮光寺等注加所領之内去年東
國御家人安緒本領之時同賜御下文訖而為平太
弘貞領所之旨捧申状之間糺明之處無相違仍被
付弘貞也云云

同

書曰　建暦三年　十月十八日　以宗監芳
尚為武蔵國新開實撿被遣圖書允清定奉行云云

按ㇾ東鑑ㇾ我ㇾ朱の武蔵國の新関ヲ地名ヲ注ㇾ
恐らくハ此小山田ㇾ
其一　小田原ヲ小山田弥三郎ㇾ
成瀬　高ケ坂森河田　真光寺　鶴間大谷廣勝　小川　木曽山　直谷　黒川
金森　金井大倉等の地ヲ領ㇾ由注ㇾ又同書ㇾ松田左馬助　布施
善三　田庄の横宮　栗飯原四ケ村落合　ㇾ
小山田庄内小野地　ㇾ
小山田庄の咽喉の地　ㇾ
家ㇾ古文書ヲ藏ㇾ
の證状　ㇾ
芝原田地　ㇾ
又二ハ関戸郷市の定日　ㇾ
関銭五貫文有山源右衛門　ㇾ

甚地関ㇾ後加ㇾ
自様令ㇾ
此小山田ㇾ
故小山田の惣領ㇾ
関戸宿商人の問屋免許ㇾ
河原の内平戒塚ㇾ
中河原の内平戒塚ㇾ
有山源右衛門ㇾ
新宿立ㇾ
岡谷某の證文ㇾ
岩本某の證文ㇾ



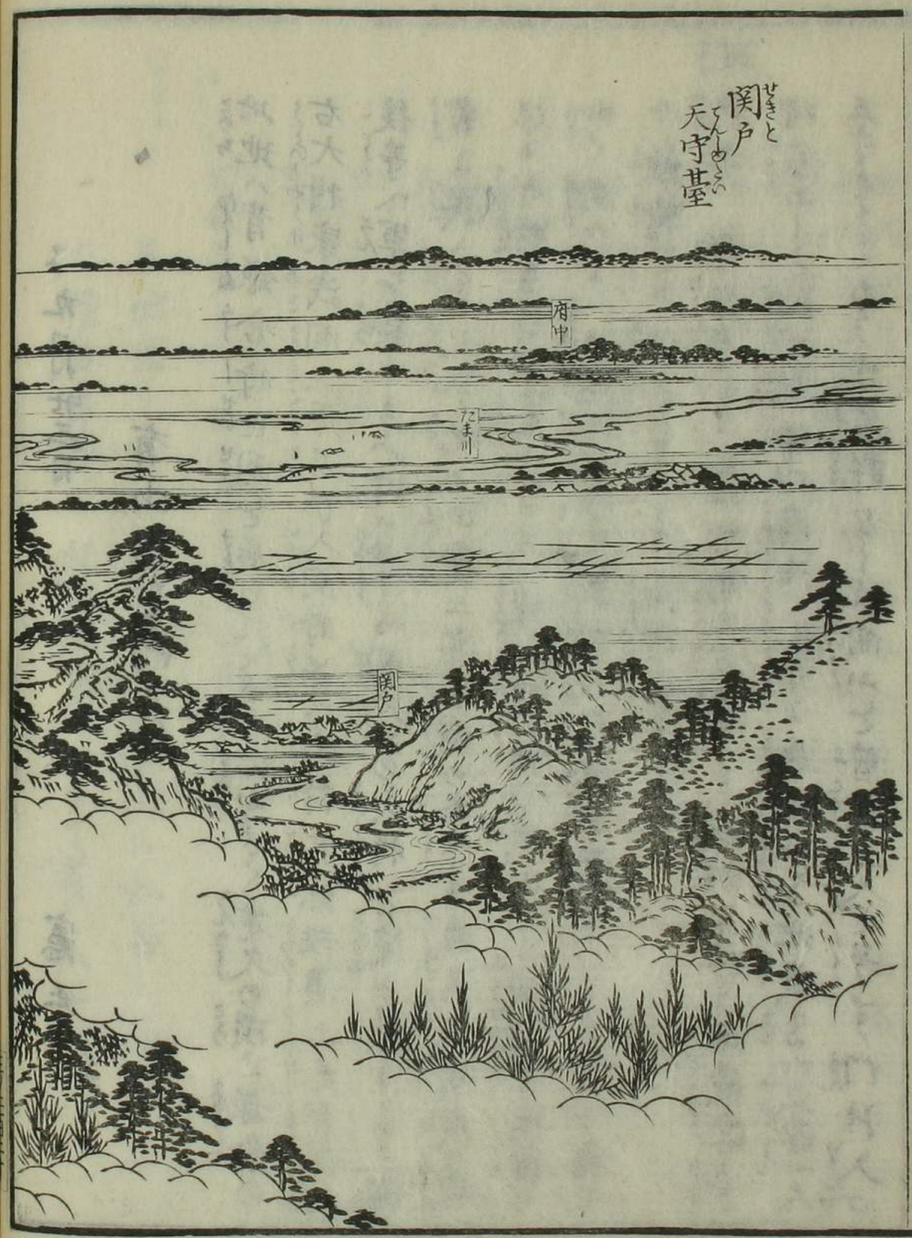
有ㇾ
ㇾ

憲秀
花押

此地ハ昔鎌倉時世関ヲ居られる旧跡やらく建久の頃ヶ鎌倉の
右大将家浅間三原及ひ入間野等へ御狩其餘陸奥上毛信濃越
後等へ軍ヲ發しゐん時ハ必ず此関戸口の大将ヲ定られしゐ諸
書ニ載ㇾ太平記ヲ披ㇾ元慶二年合戦の条下ニ義貞数箇度の戦
ひニ打勝ぬと聞えしかハ東八箇國の武士とも順付ニ雲霞の
如く関戸ニ一日逗留ありしく軍勢の着到ヲ着らるゝニ六十萬七
千餘騎とヲ注るとあるも此所のことなり

延命寺　壽徳寺より三四町南の方道より右側ニあり地蔵院と号
時宗やらく相州藤澤の清浄光寺ニ属ヲ本ヲ地蔵ヲハ立像一尺
五寸ヲ安ㇾ開山ヲ普國上人と号ス門ヨリ入口

仁王門
本堂
社務所


関戸天守堂
府中
多摩川
関戸

右の方畑の傍ヶ掾木の老樹を以印とする古塚あり正慶二年
武蔵野合戦ヶ討死せし四百餘人の墓なりとぃふを
城山　延命寺の後の山續をいふ土中稀ヶ古瓦を得ることありすべて土人云昔小田原北条家の幕下関戸
其城主及ひ時世等詳ならす
駿河守とぃふ人ありとも又ハ永禄の頃佐伯市助道永とぃふ
武士小田原の北条家ヶ仕へ此地ヶ住るとぃふ故ヶ此所を佐伯谷とも号けぃふ
明徳元年庚午念阿護法入道此地ヶ一寺を創建ありて吉祥山
壽徳寺と云禅院を再興をも此寺ハ関戸入口道右側にあり道永自ら中興開基と
なり日舜宗恵大和尚を請じ中興開山とぃふ
年己巳二月三日陸奥ヶ於て薨死せる人等皆此地ヶ葬る道永の子孫三河守道也和泉守道安同隼人
よ住ひ後ヶ民間ヶ下りて絶ぬ
天守塔　同し山續西の方ヶあり城山の半腹より曲折して山頂ヶ到る俗ヶ道永
まて老松繁茂す此所より四望をるふ尤絶景なり　近須山頂ヶ金毘羅
権現の宮を
営建せり

沓切坂　下溝戸の宿の南の坂を云坂の上を古市場と唱ふ昔商戸
驛舎等ありし地なるも天正
己来此地の古道廃して今ハ名のみとなる
されとも府中より横切ふく相州大山石尊富士詣杯
場なり　相州矢倉澤大磯等への官用の次
常州野州辺より此道ヶ
合戦の時新田義貞公脇屋義治公等ヶ二百餘騎ヶ討ぬされ御方の
勢も散々ヶ行方しれすなりしハ迚も討死をくき命ある
打入ふく足利左馬頭基氏ヶ逢ふく命を失ハさるべと夜半過る頃関戸を
過ありふる石堂入道三浦介等の五六千騎の勢ヶ出逢ふ神
奈川を径鎌倉へ打入勝利を得ふ頃此坂より馬の沓をとゞめ
されハ名とすとぃふ

赤坂塁　関戸より十六七町東の方蓮光寺村を横きりふく赤坂と号
ふく坂を登れハ赤坂塁なり一里半斗を径ふく河原谷と云地あり
平塁　赤坂塁の東の續をいふ此所ヶ三圍よりある老松一株あるを

土人甚兵衛松と字を此地ハ矢の口よ屬す

騰雲山明覚寺　矢の口村街道より南の横よ切て渡し場の南拾五町あまりの地と臨済派の禪林やゝ鎌倉建長寺よ屬を本ゐ釋迦如來ハ唐佛やゝく座像八寸ばかりの小像を當寺ハ往古足利義晴公建立なりと云傳ふ佛刹やゝく其後廢寺となりしを慶長年間加藤太郎左衛門再興して菩提寺となりと云中興開基ハ揚雲和尚永禄四年ぬと号當寺に中興す

長坂血鎗九郎陣中守護の為鎧の中ゟ篭さりしと云ふ伽羅の正觀音を安置せり立像三寸ばかりの小像なりと弘法大師の作と云ふ今ハ一尺斗の正觀音を彫造して其中よ秘安せり

小澤小太郎居宅旧地　當寺境内の辺を云今猶馬場の旧跡なりと称する地ある又當寺の前よ小高き岡あり俗ニ藏地下と号く年頃兵粮を収ゐる倉の跡なりと云ふ小太郎とハ小澤某の名ゝそ次の小澤の城址の条下ゟも云傳ふるよし詳ならず

艸原山威光寺　同所明覚寺より道を隔て、一丁斗向ゟ側二丁斗左へ入ゝあると新義真言宗やゝ大ゐなる堺濱高勝寺の屬を本ゐ大日如來座像三尺ばかりを當寺ハ穴澤天神の別當なり天明年間火災よ罹りく殿堂僧坊悉く焼亡旧記を亡せり

東鑑曰　治承四年庚子十一月十五日

武藏國威光寺著依爲源家代御祈禱所院主僧

同

僧円相兼之僧坊寺領如元被奉免之云云

同

書曰　元暦二年乙酉四月十三日

武藏國威光寺院主長栄惡祈日夜不怠然平家滅亡畢有御感沙汰之由捧去年九月所給御下文所訂申也下畧

同

領之由捧去年九月所給御下文所訂申也下畧

同

書曰　文治元年乙巳五月五日

小山太郎有高被押領寺領之由寺僧捧解状仍令停止其妨任例可令奉行之下畧

同

武藏國威光寺院主長栄惡祈日夜不怠然平家滅亡畢有御感沙汰之由捧去年九月所給御下文所訂申也下畧

同

書曰　廣藏元年己未七月十五日

藤判官代邦道等奉行之下畧

同

武藏國威光寺院主僧円海奏訴曰　柏江入道增西五十餘人悪黨乱入寺領及苅田狼藉下畧

同

書曰　建久二年辛亥十月廿六日

所可停止其妨細旨被仰下惟宗孝尚擬判官代以下畧

同

令上子細之旨可被経奏聞若有由緒者泰上政

同

小山太郎有高押領寺領之由寺僧捧解状仍

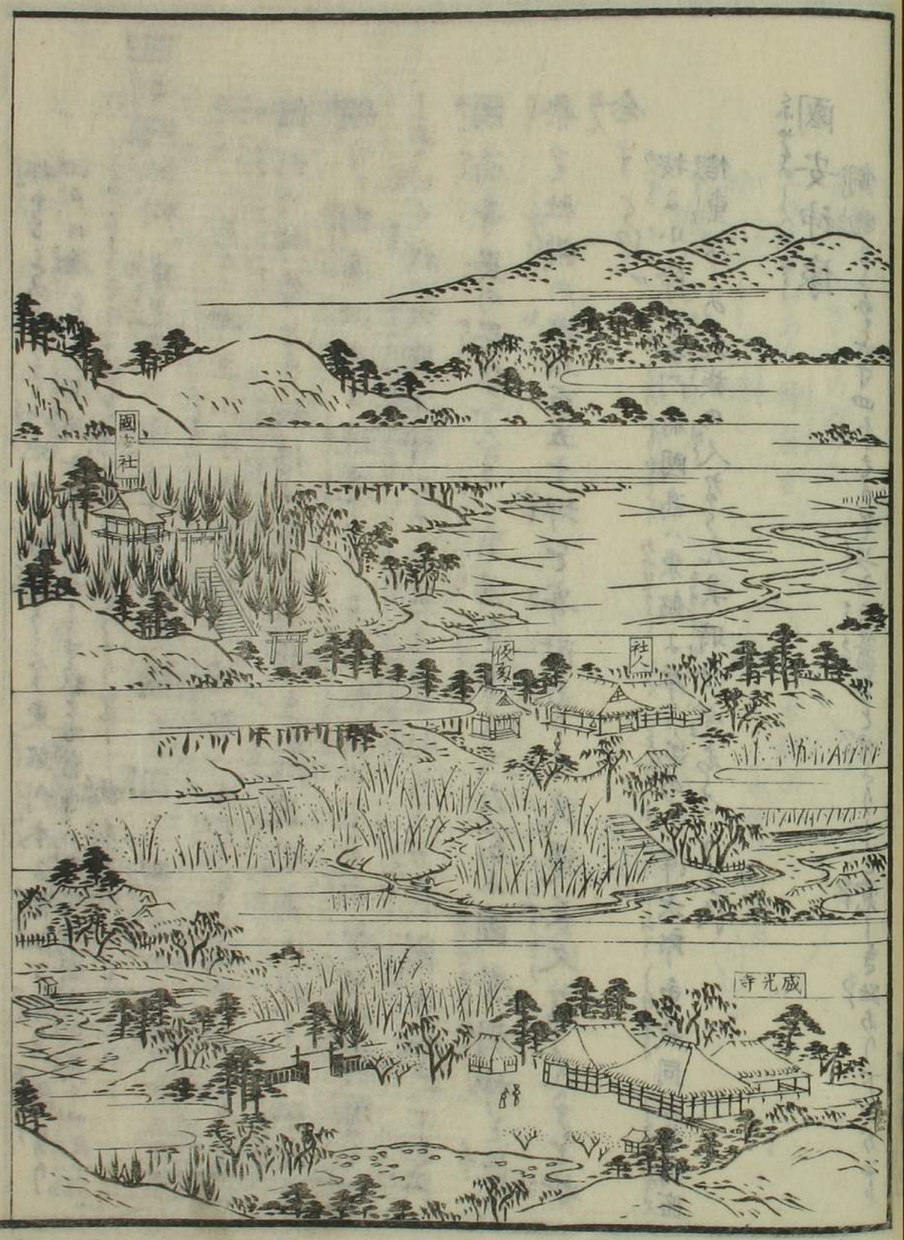
同

書曰　文治元年乙巳五月五日

威光寺用若有由緒者泰上政

同

威光寺領之由寺僧捧解状仍


國安社
社人
假殿
寺光成

國安宮
威光寺
明覚寺

称する事のあり此地より程遠からず東鎧冑本は掘江と作るは誤なり江戸の雅司谷八其間七里隔つへしされとも當寺八天明年間の火災ホ旧記亡ひとゝくさゝよ古を考へ合まくさたゝうなし猶多日訂正をくきのく

國安明神祠　威光寺の南五十歩斗を隔て同し側左の小道を三十歩斗入くあり神主山本氏奉祀す神躰ハ左のめきくのふして世ゟ云所の鋳形の神像なり相伝ふ往古小澤左衛門尉國高とゝる人此地を領す國高此地ゟ逍遥ありし頃松樹の下ゟ白髪の老翁現しホしく曰く我ハ大國主神なり此地ゟ崇祀らハ万民國安かるへしと云く

國高寺異の思ひをなし宮居を営んてたゝホ國安明神と崇め祭る社領の地八百五十坪を寄附ありく武運長久なるんを祈念すとゝゝ

按るに小澤左衛門尉國高ハ東鑑ゟ挙るホの小澤次郎重政同左近将監信重なゝの氏族の人なゝん其時世今ゟくゝん

國安神像

銅物ゝゝと六寸四分ゝゝと天蓋なと付くりしと覚しき跡あり下の方ゟ花瓶のめきくのありく上の方ゟ口あり神躰を僧形ふくく宝珠と劍とを持しゝゝ形なり

穴澤天神社　谷口邑威光寺ゟ東北の方三町斗を隔て同し往還右の方小道を入てあり社ハ山の中腹ゟあるも此辺を小澤ゝ原と唱今祭神詳なゝす後世菅神を合祭せり祭礼ハ七月廿五日なり又同日神楽を修行し九月廿五日ゟ獅子舞を奥行も別當ハ真言宗はて威光寺と号也

延喜式神名帳曰　武蔵國　多磨郡
穴澤天神社云

谷之口

穴澤天神社

此辺傍を小峯原と号く
南北の谷の山頂ハ小薄ヶ峯
重政ほろし城趾
文明のころ金子掃部助
此城を預りたまふ
吉里宮内大馬ノ扇
ハト楪山より
おりて生ヶ塚
をまもりぬ
すゆ
紅会
大まま
死よ
ゑえ

武蔵國風土記残編曰　武蔵國　多磨郡
穴澤天神　圭田三十六束三毛田　孝安天皇
四年壬辰三月所祭少名彦神也云云

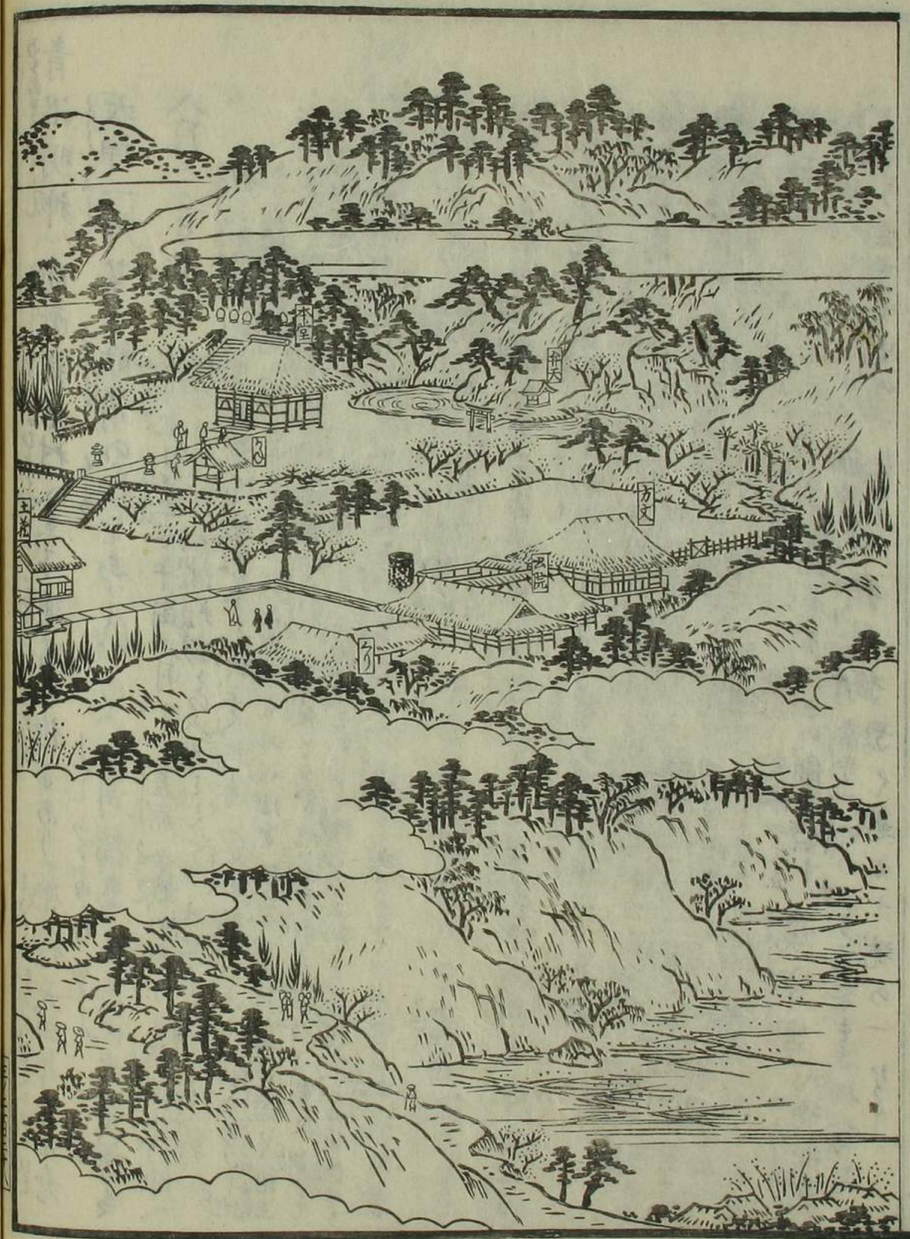
當社の麓を澗水流れて多麻川へ合せ其流を隔てゝ山岨より一の
巖嵓あり故に穴澤の名あり昔の巖洞ハ崩れたりとて今新に堀
穿てる洞穴あり洞口ハ二ッに分てあり内に種々の神佛の
小澤城址　谷口天神の山續淺間山の西へ並べる東鑑に元久二年乙丑六月
廿三日稲毛入道大河戸三郎を為誅せる子息小澤次郎重政ハ宇佐美與一
是を誅せる又同書に同年十二月三日小澤左近將監信重綾小路三位師季卿
息女を相伴ひ京都より泰着を行光を以て其由を尼御臺所の侍亭へ泰らる御猶子さる
同月四日夜に入綾小路の姫君尼御臺所へ啓せるに依て又
武蔵國小澤郷　稲毛入道遺領の内ハ二ッに分てあり鎌倉大草
紙に文明九年長尾四郎左衛門尉景春山内上杉の家務職を兼ら
ざるを憤り逆心を企顕定を亡さんとて武州相州の内一味同心せ
兵を催し上杉家を襲ふの条下に金子掃部助ハ小澤と云
城に楯籠る間大田左衛門入道下知として扇谷より勢を遣し同
三月十八日溝呂木の城を攻落を同日に磯の要害を責らる一日防
戦ひ夜に入れハ越後五郎四郎かの城を渡し降参せり
小澤城へ押寄攻るとも城難所ゆゑ落ざる景春一味の宝相
寺なり吉里宮内左衛門尉以下小澤の城の後詰として横山より
打出當國府中に陣を取る中略
小澤の城も責落されども地ハ険阻ゆゑ武蔵國風土記残篇より
向の岡　今向岡と称する地ハ多麻郡北ハ向の岡に限りあれども
東ハ未長に終るを是なり連岡の長凡六里あり
或ハ云今向の岡と称するハ多磨郡狭山ハ南北東西五里尾根山より八國山まで連
て考ふるに然なり同郡より四方共に武蔵野ゆゑ何れの方よりも岡に相對する地ハ都筑ゐ
西二十里の連岡向の岡と称ゆゑ今向の岡と称ゆゑ東
故に向の岡の名あり依て今向の岡と称する地ハ都筑ゐ
なれとも猶ほ疑をこゝに挙るのみ

武蔵國風土記残編曰
多磨郡東限草窪　岡西限金川　南限華田浦　北限向
岡云云

新勅撰　小町
武蔵野の　の岡は　なをしへ　径を分てもあとなまじひ
續古今　知家
分ぬくとたゞよやはらぐる十すゝき　向のをふ浦ごとのよ
玉葉　後一条入道
秋雲の　径をこれや分つくすむらごの　ふるきこの
同　定家
ゆふつく日　の岡は　落ちくもまさき　葛秋のをこの
夫木　為家
とゞ霞きし　の岡の　葉のそよ　ぎもの下草
家集　後鳥羽院
いつのまに　の岡の小松原　風もとゞまでなりぬるろ
名所考　隆源
夕日さす　の岡のまた　時雨
都筑の岳　緩喜或楸　小佛の嶺より小山田里迄ハ多磨郡ゟ屬せり平山或ゟ
横山なとゝいひ　既ゟ古奇ゆゑ玉の　世間ゟあり又官林の
案内山と云より神奈川迄の間ハ都筑郡ゟ屬せり南北ゟ高底ゟく
坂東路　几百里あまりの　續くかふつきの岳の名ありとゝ

青沼明神　同所長沼村八王子通道の傍ゟあり祭神大田命猿田彦
大神二神なり　勧請の初をあらく
八月十五日なり　太平記ゟ正平七年閏二月小手差原合戦の条下ゟ将軍の御陣へ馳参る人々中ゟ長沼判官とゝの名
社司福島氏奉祀を祭禮ゟ
按ゟ當社ハ延喜式内青渭神社なりと云されハゆゑ
なる長沼の号ありと云されハゆゑ
和名類聚抄ゟ武蔵國比企郡
ありし　然る時ハ當社を以延喜式内の青渭
谷の口の東の山續矢の口渡し場より十三町東南の方
仙谷山壽福禪寺　此地ハ多磨郡後橋樹郡ゟ屬せり此辺ゟ小澤郷ともゝゝ
菅村ゟあり　推古天皇六年戊午聖徳太子草
創なりとゝ　佛刹なりとゝ　昔ハ天台宗なり　建長寺の大安禪師の時
より禪林となす　今ハ曹洞派となり　越前の永平寺ゟ屬を
本堂本尊十一面觀世音　同開山ハ相伴ゟ鳥佛師の雕刻或云和州長谷寺の像と同木
鐘　右ゟあり井田六郎右衛門尉某應永七年庚辰當寺住持の沙門比丘宗四の項半
鐘を寄進す　破裂ゟよりく寛文二年鋳改る　當寺住持比丘融峯の文ゟゝ
阿弥陀堂　同し左ゟあり　高應殿と号す　本ハ座像四尺五六寸作着不知左右ゟ地蔵多門ホの像を安す
鎮守宮　大黒　親王の四座をまつる　擁護廟　八幡稲荷
指月橋　當寺門外の流ゟふ架ゟる　夜橋を
号く是ゟ十境の一なり

寿福寺
八幡
庵
指月橋



餐霞谷 同所の庫裡の後の谷を云道歟の旧跡なり故ふ今採薬阜 素福日本よ此地を守る 仙谷 号く是も當寺十境の一なり 同所関の左よりの谷を云 今ハ拈り来り仙薬を攫霧松 枝やゝ霧を攫う姿ありと云 一根五方丈 晩成室 十境の一なり

大般若経六百巻 梵函より収蔵す 紙ハ黄色中ゝ厚し 上古名緇高素の毫痕 其若を注せり 相伝ふ文治年間源義経と称し憑慶の地より魁い曽祖の例跡を追ひ當寺観音のる前より妖後の應驗を祈り特よ大會堂よ入て文治年間往来の納冥す 永徳壬戌鎌倉左兵衛督氏満師の徳を慕ひ参謁の次再ひ此地往の毫損を修補する由縁起よ

夫仙谷山寿福寺者推古天皇六代戊午年聖徳皇太子就于高橋妃之亡妣入阿弥尼公終焉之地也蓋山曰仙谷者建七區練若以資薦冥福之舊趾也盖山曰仙谷者有仙人道鏡者栖遅于此山錬行修身積有年矣故曰道鏡谷也今古怪異之事甚多矣是仙人所為也寺曰寿福者曽芟榛夷地之時得虚空蔵薩埵之聖像因標福一満之聖跡後建長曜侍者騰虚空蔵薩埵之人手墨鋟梓寄焉寺寺之和州長谷寺之像同刻焉木同雕也康平年中八幡太郎曰義家欲排付奥州逆徒出陣之時中路而宿于茲揭小澤小太郎祈願運於斯像後逆果獲遇慼矣在昔小

重政毎晨旋歩像前勉於晨香夕燈修現當之善因矣梵函大般若経者名縮高素之毫痕也文治年中源義経泊弁慶暫憩行於此地追曽祖之例跡祈恢復之應験特後徳寫経之願而今尚現存矣雖然間師遭兵災寺既敗壊年久矣爰有前住建長大安禅師風雲僧俗力與荒廃始振禅宇壁之修補此経安寺殿宇既而安十一面大悲像於大黒天善應請辨財尊天八幡大菩薩稲荷大明神於擁護廟縁是仰皇

應永十四丁亥稔六月十八日 山門宗圓敬記焉

相傳推古天皇六年戊午聖徳皇太子高橋の妃の亡妣入阿弥尼公終焉の地よ就て七區の練若を搬建し以て冥福を資の舊跡なり山を仙谷とゝいふ仙人道鏡なる者此山よ隠栖し練行修身事積く年あるを故よ亦道鏡谷ともゝふ今古怪異のゝ甚多し是寺を壽福とゝいふ仙人の所為なりと云曽て芟榛夷地の時虚空蔵薩埵の像を得たり因て福一満の聖跡を

水玉を吐く

標して以て寺の速大を祝せ
康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時中路茲に宿せ其頃當
寺本尊に開運を祈る後果して感遇を獲たり昔小澤小太郎重政毎
晨歩を像前に旋して現當の善因を修す然に兵災に遭て寺宇既に
敗壊せるの年久し爰に鎌倉建長寺の大安禅師大方慶和尚此地に
卓錫し荒廃を興し始て禅風を振ふ依て僧俗雲集せ（或云建長寺
和尚是大方慶然に永徳二年壬戌八十四世法慶
といふ誤なり）
慕ひて参謁せるの次三個の殿宇を造営せられたりとなり
（殿權護
願是也）

## 展翼峰　寿福寺の左に續きたる山を云俗に神明山とも其形鳥の翼
展るが如し故に号とす相傳當社神明宮は昔小机より飛来ここに
鎮座なりと云（寿福寺境の一なり）

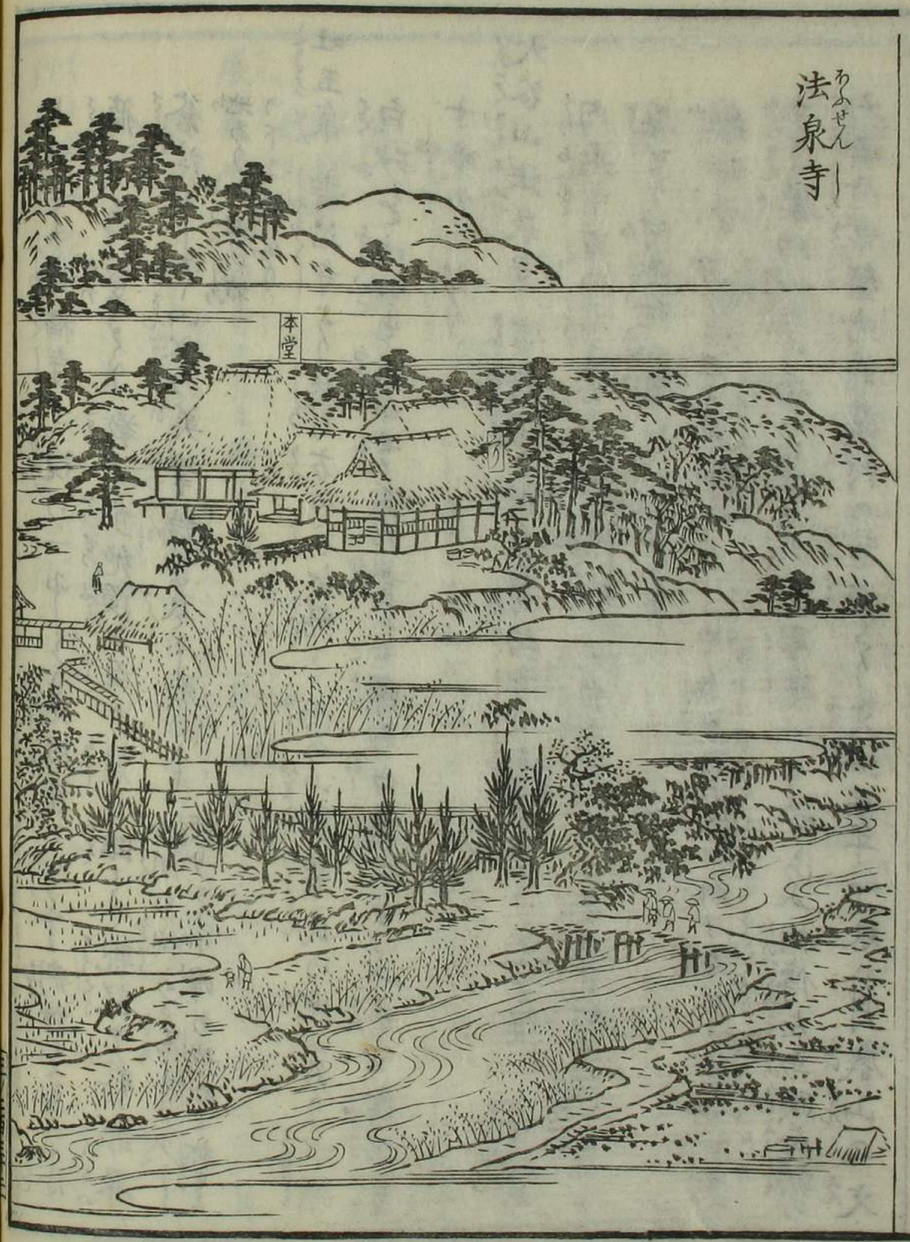
## 浅間山　同し山續にて山頂に浅間の小祠あり依て名とす土人は城の浅間山
と云是も寿福寺十境の一なり光聡崖と号す荊棘を刈き小
徑を登ること数十歩絶頂に至り崖に臨て眺望すれば眼界
蒼茫として山水の美筆端に尽しがたし
（地あり小澤の城
の下に詳なり）

## 吐玉泉　寿福寺より後の方の谷を隔て西の山際農民の地にあり水源
白砂を吹出す故に号とす昔は小澤の白清水と云ひ是も寿福寺
十境の一なり

## 大谷山法泉寺　吉祥院と号を寿福寺の南十町ばかりを隔て菅村の
内府中道の右にあり（細毛須小澤郷に属す）天台宗にして深大寺村の深大寺に
属せり阿弥陀如来を本尊とす

## 薬師堂　寺より西の後一町半ばかり又縁日八月八九月八日十二日にて此日もまた賑へり
本尊薬師如来の像は慈覚大師彫造にして相傳左馬頭義朝の
御臺所常盤御前護持の霊像なり文治三年丁未八月歳山の文

権現
天王
弁天
福昌寺


法泉寺
本堂

顯阿闍梨此地の領主稻毛三郎重成と共よ謀り當山を開き一宇の梵刹とし此靈像を安置せしより後平政子御前崇敬あり其頃賴朝卿よりも香花の資料とし當國高麗郡の地を寄附せらる建久八年丁巳賴朝卿當寺へ詣でゝ又康元二年丙辰五月賴嗣公賴經公の菩提のため御堂再興なりしより大伽藍となりしと正慶建武の兵乱よ廢壞せしより後旧貫よ復するなしとぞ鎧櫃唐木小机等よ二品ハ賴朝卿の寄附なりと云傳へ當寺の什宝とす

# 江戸名所圖繪全部并卷目次


壹之卷三冊　日本橋本町通神田小川町飯田町兩國靈巖島八町堀築地鐵炮洲芝口愛宕下西久保赤羽根三田魚藍白銀芝浦

二之卷三冊　品川驛大井鈴ヶ森池上大口大森蒲田八幡六郷川崎鶴見

三之卷四冊　生麥神奈川本牧程ヶ谷杉田金澤

四之卷三冊　外櫻田霞關永田馬場平川溜池麻布廣尾青山目黒碑文谷北澤

五之卷二冊　世田ヶ谷澁谷四谷千駄ヶ谷代々木高井戸武藏野府中玉川向ノ岡

六之卷二冊　市谷牛込小石川大窪柏木成子堀之内中野小金井築土高田大塚雜司ヶ谷巢鴨板橋練馬大宮野火止

七之卷三冊　湯島上野日暮根津谷中三崎駒込王子川口豐島川淺草下谷根岸山谷橋場千住西新井深川本所龜戸押上柳島隅田川木下川松戸行德國府臺八幡船橋



天保五年甲午孟春

日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛

淺草茅町二丁目　須原屋伊三郎

出版發行　未春

三都發
行書林

京都寺町通松原下ル
勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町
河内屋太助
大坂心齋橋筋安堂寺町
秋田屋太右衛門
江戸兩國吉川町
山田佐助
江戸神田鍛冶町二丁目
北島順四郎
江戸淺草新寺町
和泉屋庄次郎
江戸芝神明前
岡田屋嘉七
江戸日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛
江戸日本橋通二丁目
小林新兵衛
江戸日本橋通四丁目
須原屋佐助
江戸南傳馬町壹町目
須原屋文助
江戸神田通新石町
須原屋源助